
大魔術師と助手

沢風 炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大魔術師と助手

【Nコード】

N0876Y

【作者名】

沢風 炯

【あらすじ】

弓術師で賞金稼ぎ、男と間違えられること多々ありのフィフィは、ふいに安定した高収入を求めて城の大魔術師助手の面接を受ける事に。

さくつと面接に受かったものの、その大魔術師アシュリーに会ってみれば「要らない」と言われる始末。負ければ即・クビの御前試合でなんとか残り、正式に助手（何故か兼護衛）となったものの、一向に「要らない」と言われ放置されるのは変わらず・・・。

そんなアシュリーに勝手についていく彼女と、彼女を面白がって

応援する城の住人達。徐々に距離の近づいて行くアシュリーとファイの物語。

プロローグ

孤島の王国があつた。

大昔には誰も知らなかった王国。

外界となんの接触もなく時を過ごしたその国は

何時でも花が咲き乱れており、とても美しく、平和で、穏やかな国だった。

治めるのは代々女王。

優雅で美しく、聡明で、誰からも好かれていた。

??時代が移り変わり

やがて一隻の船がこの孤島を見つけると、瞬く間に外界との交流が始まった。

文化、物資、様々なものが行き来し

いつしか王国に、外界の血が混じるようになっていった。

それは、王家にも言える事。

しかしその頃から、王国の花々は枯れていった。

憂えた誰もが親身になって世話をしても

それを拒絶するかのようになり、花は枯れていった。

そして、花が枯れるにつれ、孤島を囲む海が荒れていった。

徐々に外界は孤島に近付くのを止め、遂には誰も近寄らなくなつた。

海は荒れ、花は枯れ、人も病に倒れるものが多くなっていった。

それでも、王家だけは病に倒れなかった。
けれどもいつも悲しみが付き纏い、次第に莊嚴そうごんな城から出る事は
無くなった。

失意の底で、女王は祈る。

どうかこの海が静まるよう。

どうかこの花々が咲き乱れるよう。

どうか病が無くなるよう。

どうか、どうか??

この王国が、かつての美しい姿を取り戻すよう。

そして??

願わくば、哀れな私の娘が、愛するあの方と共にいれるよう。

その晩、女王は眠りについた。

眠りは夢を誘い、彼女を虜にする。

咲き乱れる花々。楽しそうな人々。静かに波打つ海。
あの方と幸せそうにする娘。

全てが望むもの。
全てが懂れるもの。

そんな夢を毎晩見るようになっていた。
そんな夢にずっといたいと思う様になっていた。
それが現実ならいいのにと願うようになっていた。

ある朝、姿を見せない母を不思議に思った王女は、そっと母の寝室を覗いた。

眠っている母の顔を見て、王女は少し微笑んだ。

その顔が、あまりに幸せそうに満ち足りていたから。

しかし、そっと頬を撫でて凍り付いた。

女王はもう、冷たくなっていた。
それなのにどうだろう。

その肌は柔らかく、まるで生きているかのよう。
鼓動も止まり、息もしていない。

それなのに、女王は眠っているようにみえる。

その肌は、冷たく。

しかし、生きてはいない。

いつの間にか、母の周りには、失われた花々が芽吹き始めていた。

時は流れ??

ここはクライスト帝国。

大陸の中心を統べる大国であり、その中心である王族、軍人のみならず国民さえもが国を考え、国を作っている。絶対的な信頼でこの国は成り立っていた。

その帝国一のギルドで今、運命の歯車が廻り始める??。

「高収入? そんなのいくらでもあるだろうが。ほれ、こいつなんか生け捕りにしたらかなりの大金だぞ?」

そう言ってギルドの男が指名手配書をひらひらと振る。それをうっとおしそうに見やり、相手は言葉を続けた。

「そうじゃなくて、持続出来るものないか?」

ギルドの男はぴくりと眉を跳ね上げ、訊ねた相手を睨んだ。

「だったら城にでも行け! ここは安定職の仲介所じゃねえ。」

「じゃあ城関連のないのかよ。」

「城に行きゃあ分かる事だろうが!」

はあ、と相手は大仰に溜め息を吐く。わざとらしく落胆して見せた。

「帝国一のギルドだっていうから、期待してきたのに残念だな。結局他廻るしかないのか。無駄足だったな。」

相手はまだ二十歳前後だろう。細身の体は鍛えてありそうだが、別段熟練した風でもない。そんな青二才に馬鹿にされるわけにはいかなかった。

「無駄足だと!？」

「だってないんだろ? 城の仕事は城に行かなきゃ分かんないんだろ? なら無駄足じゃねーか。」

「おい: ナメた事言ってんじゃねえぞ。」

そう言うと、ギルドの男は何かを思い出したようで、忙しくリストをめくると、一枚の紙を嫌味な笑顔とともに突き出してきた。

「月収200万イルだ! 文句ねえだろうが!」

返事はせず、相手は紙をひったくると内容を確認し始めた。

「……大魔術師の助手? 該当者も内容も、全部わかんねえじゃねえかよ!」

「面接で話すって書いてあんだろうが? どうすんだ。」

「……仕方ねーな。受理しろ。」

「偉そうに言うんじゃねえよ!」

ギルドの男は荒々しく書類に判を押し、相手に押し付ける様にして渡した。こんな生意気なガキの相手などしていただくはない。

「さっさと失せやがれ!」

そう怒鳴ったものの、身体に触れて違和感を感じた。男の顔色が変わると、相手は舌打ちとともに紙を奪い取り、一步離れてから不遜に笑う。

「礼は言っというてやるよ。」

捨て台詞とともにさっさと出口へ向かう。

男は何も言えないまま、扉が閉まるのを見ていた。

クライストの城では、一つの魔法陣の前で思い悩む女性がいた。

名はニルヴァ？ナ。

呼び名はニル。

儂気だが芯の強そうな瞳は赤みを帯びた紫。端麗な容姿を飾る真っ直ぐで長い髪は艶めく銀色。少し突き放した物言いをするが、困っている者を放っておけない性格から、男女から好かれる大魔術師だ。

「さて：なんて説得しようかしら：」

今も放って置けない事態をなんとかしようと、思い悩んでいる。すると廊下から声をかけられた。

「ニルヴァ？ナ様！いらっしやいますでしょうか？」

兵士だろう。

ニルは魔法陣を諦め、扉を開けた。

「なに？」

「はっ！ギルドから、助手の希望者が来ております！」

「助手…？ああ、あれね！どこにいるの？」

「はっ！検問室で待機しております！」

「そう、ありがとう。」

それだけ言ってニルは歩き出す。兵士は数秒見送っていた。

「ニルヴァ？ナ様…お綺麗だ…！」

検問室に入ると、すぐに希望者が目に入った。厚手のマントを羽織り、緊張した様子もなく椅子に座っている。その様に、思わず笑ってしまった。すると希望者がこちらを見て立ち上がった。

「私は大魔術師のニルヴァ？ナよ。」

「…弓術士のフィィです。助手を探してるのは貴方ですか？」

「…：貴方、女性？」

「はい。よく間違えられますが、女です。」

ニルはまじまじとフィィを見てしまった。

薄茶の髪は肩につくかつかないくらいで、背も女性にしては高め、男性にしては低めといったところ。顔立ちも中性的で、男だと判断されるのは、少し低めの声と、落着いた、少し堂々とした態度からだろう。

「…男名を下さると便利なんですが。」

その台詞に、今度は嘖き出してしまった。

「面白い人ね！さ、座って。話をするわ。」

言われてフィフィが腰を下ろすと、ニルは少し楽しそうに話しかけた。

「ここへ来る前は何を？」

「ギルドで色々。主に賞金稼ぎです。」

「そう。こういう仕事は？」

「した事はありません。」

「魔術に興味があるの？」

「いえ、特には…」

「家事は出来る？」

「……はあ、一通りは…。自分が生活出来る程度には出来ますが…」

「そう。男は嫌い？」

「……特には…」

「他国には行ってみたいと思う？」

「……まあ、多少は…」

「面倒見はいい？」

「……面倒見た事ないのでなんとも…」

「そう。素直なのね。」

「…そうですか？」

ニルは何やら頷くと、にっこりとフィフィに微笑んだ。

「では試用期間を設けましょう。3週間頑張ってみて。」

そう言ってニルは席を立つ。すると、フィフィが慌てて呼びかけてきた。

「え！？ちよっ…今ので終わり？」

「あら、終わり。充分よ？」

「いやいやいや、仕事内容は？」

「ああ…本人に聞いて頂戴。」

「ん…？」

フィフィはまじまじとニルを見た。

「貴方の助手じゃないんですか…？」

「あら…私の助手じゃないわよ？私にはもういるもの。助手が必要なのはもう一人の方なの。あ、これ書類ね。持って行って。」

「もう一人…？」

そうそう、とニルは頷く。

「あ、あと男名ね。フィアニスと名乗ってもいいわ。好きな様に使って。ただし王家の方々には女名でね。」

「もう一人って？」

フィフィは今にも去りそうなニルに懸命に言葉を投げる。対してニルはにっこりと笑って言った。

「部屋の外にいる兵士が案内するから、ついて行きなさい。じゃあね。」

そう言ってニルが手を振って部屋を出ると、入れ替わりに兵士が入ってきた。

「ご案内致します、フィアニス様！」

「……………」

置いて行かれたフィフィは、仕方なしに少々疲れた思考を切り替えた。

（もう男の設定でいいんだな？）

取りあえず面接は通ったようだ。

今からその大魔術師の元へ案内してくれるようだし、それなら言われた通り、本人に色々訊くのが得策だろう。

そう考えて、フィフィは兵士に向き直って頷いた。

「頼む。」

取りあえずは、ついていく他ないだろう。

城の長い廊下を淡々と歩く。

無機質なところもあり、中庭に面した暖かいところもあり、長くいたらおかしくなりそうだと、フィフィは兵士に視線を移した。

「あ：俺がつく大魔術師ってどんな人？」

あたし、と言いかけて慌てて直す。兵士は気付いた様子もなくフィフィの話に答えた。

「アシュリー様ですね！あの方は、大陸屈指の大魔術師です！！」
「ふーん。で、性格は？」

得意げな様子をさらりと流し、フィフィは気になるところを訊いてみた。

しかし兵士は、途端に勢いを失う。

「性格は…」

嫌な予感がする。

「なに？」

「…いえ…：そうですね…：非常に関心が薄いといえますか…」

「何に。」

「その…：色々なものに…：…」

何と言ったらしいのか、と兵士は考え始めてしまった。

（とんでもないナルシストじゃねーよな…？）

不安に思っただけ聞いてみる。

「自分にしか興味がないとか？」

「いえ！そのような事はございません！」

即答だ。

「ならその曖昧な言い方はどっから来るんだよ。」

「はあ…申し訳ございません…何分色々難しい方です…」

「難しいって…頑固親父かよ。」

「いえいえ！あの方はまだお若いですよ。フィアニス様と同じ年頃ではないかと。」

「んじゃ気難しいんだな。」

「気難しい…そうですね…そういうところもお持ちですね…」

「はつきりしねーなあ。」

「はあ…申し訳ございません…」

すまなそうにする兵士を一瞥し、フィフィは話を止めた。一体どんな人物なのか、非常に不安がある。

（いくら城の人間だって言っても、変人だったらさっさととんずらするか。安定収入は諦めるしかねえな。）

そんな事を思っていると、目的の場所についたようだ。兵士が廊下の端へ避け、姿勢正しく直立していた。

「こちらがアシュリー様の回廊になっております！」
「へー。」

兵士が指し示した方を見て、フィフィは戸惑った。そして、先程の兵士の台詞を思い出す。

「…ん？……回廊？」

「はい！大魔術師様お二人には、皇帝陛下より、回廊が与えられております！そして、こちらがアシュリー様の回廊になります！」

「……………は？」

フィフィはもう一度その“回廊”を見る。廊下から続く扉を少し開けると、中にはまだ通路が続いており、今まで歩いてきた廊下から少し外を覗くと、その“回廊”とやらがL字型にまだ続いているのが容易に分かった。

「……で？案内はここまでってか？」

若干威圧的なフィフィの言葉に少し気圧されつつも、兵士ははっきりとした口調で答えた。

「は、はい！お二人の回廊には、それぞれに属する者しか立ち入る事を許されておりません！」

「あたゝ俺も属してねえだろ！？」

「はっ！ニルヴァ？ナ様に渡された書類をお持ちですから、危険はありません！」

「危険ってなんだよ！」

物騒な言葉に慌てて食い付くと、兵士はそれを聞かなかった事にし
て続けた。

「ともかく、お進み下さい！私はニルヴァ？ナ様より、ここまでの
案内を任されております故、これにて失礼させて頂きます！」

言うだけ言って兵士はくるりと踵を返し、逃げるように離れて行く。

「おいお前！」

怒鳴るように呼ばれて兵士はさっと振り返り、敬礼した。

「御武運を！」

「はいっ？」

そのまま急ぎ足で逃げて行ってしまった。

「っ……………」

脱力してそれを見送る形となったフィフィは、ニルヴァ？ナから手
渡された書類をまじまじと見つめた。

（ほんつとにコレがあれば大丈夫なんだろうな……………見ても分かん
ねえ。）

書類と睨み合う事、数分。

（行くしかねえ！）

ぐつと拳を握りしめ、フィフィは回廊の扉を開けた。

ギイイ? ? ?、と嫌な音がする。

(うわっ、幽霊でも棲んでそうだな!)

若干ビビってしまう。だが、顔も見ずに帰るわけにいかない。それに上手く行けば安定した高収入が待っているのだ。

「アシュリー様!! ギルドから、助手として来ました、フィアニスです!!」

これでもかという程の大声でアシュリーなる人物を呼ぶ。

こんな広そうな回廊、隅々まで探す気は毛頭ない。大体、あまり人は入れないようだから、これだけ騒げばきっと出てくるだろう。

「アシュリー様!!」

肝を据えて、出来るだけ大股で歩いていく。

「アシュリー様!! 助手のフィアニスです!!」

何度も叫んで自分でも煩いと思い始めた頃、通路に並んでいる扉の中に、少し大きなものを見つけた。

「……………」

明らかに他とは違う。というよりは、石の壁に扉のように切り込みが入っていて、中央に光る石が埋めてあった。

（怪しいよなあ…。ここにいんのか？）

じっくりと観察し、その割りにはあまり考えずに、その石に手を当ててみる。

（……………）

「何も……………っ!？」

何も起こらないと思った矢先、石は眩しく瞬き、扉がすうっと消え去った。

その先は、真っ暗で何も見えない。

「……………へえー……………すげえ…」

しげしげと消えた所を観察し、そっと足を踏み入れた。

真っ暗だったそこは、ファイファイが踏み入れた瞬間、左右の壁に次々と火が灯っていき、下へ続く階段をはっきりと見せた。

「…………アシュリー様ー!？」

階段の奥へと叫ぶ。しばらく待つと、微かに何か音がした。

（…変な実験とかしてて突然化け物とか出てきたらどうしようかな…）

なんて事を思いつつ、ゆっくりと警戒しながら石段を降りてゆく。

「アシュリー様ー？ いますかー？」

声のボリュームを落とし、慎重に足を進める。

「アシュリー様ー？」

階段は長いようで短く、簡単に突き当たりへ行き着いてしまった。
目の前には、木製の扉。

（…これ…開けるんだよね？）

不安を抱えながらも、この向こうに何かいる、という確信があった。

（よしっ！）

意を決して、扉を押した。

こちらは、回廊の入り口の扉が嘘に思える程軽く、滑らかに動いた。
それに感心しつつもフィフィは中を伺い見る。

「…アシュリー様ー？」

部屋は薄暗かったが、かろうじて部屋の様子は分かった。
どうやらいくつか大きな本棚があり、本は床に散らかっているよう
だ。中央には大きな机があるのが分かった。

（ようするに散らかしっ放しなんだな、アシュリーとやらは。）

「……う…」

(!?)

部屋の中央からうめき声が聞こえた気がした。人の気配もする。
お目当ての人物かと思い、そうっと無造作に散らばる本を避けつつ
机によると、誰かが机に突っ伏しているようだった。

(ん…?)

その“誰か”の耳元が、弱々しく光っている。
興味を惹かれて覗き込んでみると、耳飾りの宝石が、僅かに光を放
っているようだった。

(すげえ…光る石なんてあるんだな…)

その幻想的な光景を思わず観察してしまう。その視線に気付いたか
のように、光がこちらを“見た”気がした。

(んっ!?)

まさか、と思った瞬間だった。

「!?’

飾りの宝石から眩いばかりの光りが飛び出したかと思うと、凄い早
さでフィフィの周りを飛び出したのだ。

「なっ…!?’

とっさに逃げようとするが動きが早過ぎて進路が見えない。光はフイフィの眼前を眩しい光で埋め尽くす。

おまけに鈴を振るような音が、どんどん大きくなって行って、ひどい耳鳴りがしてきた。

（眩し…それに、耳が…!!）

眩しさのあまり視界を奪われ、耳を塞ぐ為に身体を動かせば、それにすら耐えられず、バランスを崩した。

まばゆい光。

ひどい耳鳴り。

フィフィは完全に目を閉じ、耳を塞ぎ、その場にしゃがみ込んで動けなくなった。

その時、積み上げられた本の山を崩してしまったのだが、フィフィはまったく気付けない。だが机に突っ伏していた人物は、その大きな音で目を覚ました。

（!?!?…人?）

「ウェスperl止めろ!」

明らかに侵入者を威嚇している使い魔に命令を下すと、光は一瞬驚いて固まり、ちらりとふてくされたようにして耳飾りの宝石に戻っ

た。

「ああ、ありがとうな。お陰で安心して寝れたよ。」

そう言って機嫌をとると、嬉しそうに、可愛らしい鈴の音で答えた。光りも大人しくなっている。

そして、部屋の灯りが瞬時に灯った。

（で、この人は…？）

侵入者と言えど、城からなんらかの許可が出ている筈だ。でなければこの回廊へ入る事すら出来ないのだから。

しかしウエスペルの事を知らないとなると、王家からの許可を受けた者ではないだろう。

つまり“賓客”ではない。

（可哀相に。もろにウエスペルの攻撃を受けてるとなると、ニルの仕業か…？）

1021 (後書き)

ご意見、ご感想をいただけると舞い上がります

話しかけても今は音が聞こえないだろう。
そう思って、そつと瞼を手で覆う。

一瞬びくりとしたが、眩しさを軽減出来る事に安心したのだろう。
しばらくそのまま大人しくしていた。

そして、そつと手を外してやると、ゆっくりと瞼を上げた。

(……なんか…ぼんやりしててよく見えねえな。)

目の前に誰かいるのは分かる。先程机に突っ伏していた人物だろうか。

それと、部屋の灯りがついていた。

(あ、見えてきた…)

だんだんと目に映る風景が鮮明に見えてくる。すると、目の前にいる人物が男だと分かった。

若い。歳は同じくらいか、もしかすると下かも知れない。

明るい灰色の髪は肩くらいで、首の後ろで一つに纏めているものの、纏めきれない髪が両頬にかかっている。瞳は深い群青色だった。顔立ちは若干幼く見える。

その人物は、瞼からどけた手を、耳を塞いでいるフィフィの手に重

ねてきた。

その行動に戸惑ったが、任せた方がいい気がした。

しばらくそのまま、やがてそっと手を離す。つられるようにフィも耳から手を離れた。

「……聞……る？」

聴覚もやられていたらしい。フィフィが困った様に眉根を寄せると、その人物は大きな声で話した。そうすると丁度よく聞こえる。

「しばらくすれば戻るから。」

聞こえた言葉によくよく頷いた。それを確認すると、その人物は立ち上がり、奥の扉へ向かった。

（まだ奥があったのか……あいつがアシュリー様か？ わっかいなあ……さっきのニルヴァ？ ナ様も若かったけど……）

そんな事を思っていると、アシュリーと思われる人物が戻ってきた。手にはポットとカップだ。足音がさっきよりも鮮明に聞こえた。

（耳も戻ってきたかな……）

そう思い、ゆっくりと立ち上がってみた。よろめく事もなかったのもう大丈夫だと思われる。

試しに口を開くと、しっかりと自分の声が聞こえた。

「アシュリー様ですか？」

そう声をかけると、アシュリーと思われる人物は一瞬フィィィを見
て固まり、続いて何も聞こえなかったかのように椅子を勧めてきた。

「まあ座って。お茶煎れたから。」

「……………」

言った本人はすでに座ってカップに口をつけていた。

「失礼します。」

腰掛け、有り難くお茶を頂く。

「書類は？」

言われて一瞬なんの事かと思ったが、慌ててニルに渡された書類を
差し出す。

アシュリーと思われる人物はそれを受け取って、書類をじっくり眺
めた。

「……助手？」

書類を見たまま、訝し気にそう言う。フィィィはギルドで見た紹介
状を思い出して頷いた。

「それで来た筈です。」

「…筈って……」

「で、アシュリー様ですか？」

そう言うと、アシュリーと思われる人物はしばらく悩んだ。

（何悩んでんだよ。二者択一じゃねえか。）

大丈夫だろうか。ちょっと不安だ。

「俺がアシュリーだけど…」

（やっぱそうだよな？何悩んでたんだ？）

そんな様子には気付かず、アシュリーは怪訝そうにフィフィを見た。

「なんだって、助手？」

「俺に聞かれても…そういう紹介だったんで。」

（なんで本人が分かんないんだ？）

「ニルヴァ？ナ様には、試用期間三ヶ月と言われました。」

「ニル……！」

驚いた次には、頭を抱えてしまった。ちょっと心配になってくる。

（もしかして助手って、頭のか？）

と、勝手に失礼な事を考える。すると、はっと顔を上げてフィフィを見た。慌てて姿勢を正す。

「…なんで希望したの？」

「…安定した高収入の為です。」

言われてアシユリーは慌てて書類を見直した。

「月給200万ソル」？」

「…アシユリー様は御存知なかったんですか？」

「……………」

（冷や汗でてんど。大丈夫かあ？）

口を開けたままわなわなしているアシユリーを見て、フィフィは丁寧に頭を下げた。

「でもまあ取り合えず助手なんで。よろしくお願いします。」

ぺこり、と頭を下げる。アシユリーはそれを呆然と見ていた。が。

「……要らない。」

「は？」

まさかと思って聞き返すと、さっきとは打って変わって、驚愕する様子も戸惑いもなく、迷惑そうな顔をしていた。

（…なんだコイツ）

思わずぴくりと口の端が動く。

「助手は要らない。俺には必要ない。」

「…そう言われても。」

言い返すのだが、ずい、と書類を押し付けられる。

「ニルにそう言っで。」

一方的なアシユリーを無視して、フィフィは拒む。

「困ります。書類にはもう契約済みになってるじゃないですか。」

「でも要らないんだ。帰って。」

「帰りません。せめて三ヶ月は。」

睨み合う事しばし。アシユリーは何かに気付いて押し付けていた手を引っ込め、青ざめた。

「き、君…！」

（あ、そう言えばそうだった…。）

失念していた自分を少し恥じる。だが、済んでしまった事態は仕方がない。それよりもこの仕事を白紙にされては困る。

「なんと言われても帰りません。書類上では契約は済んでるし、せめて三ヶ月の試用期間は認めて下さい。」

フィフィが女である事に気付き一瞬怯んだアシユリーだったが、直ぐに体勢を立て直した。

「……ニルと話してくる。」

そう言っで出入り口へ向かってしまう。

「ちょっと！俺はどうすれば？」

「そこに座ってて。」

思い切り睨みつけられた様な気がするのは気のせいだろうか。

「あっ」

さっと書類をかすめ取って、奪えないように上へ掲げる。

「書類は預かります。話し合いに必要ないでしょ？」

「……………」

（このやろう、ってか？思ってる事顔にでてんぞ、アシュリー様。怖かねえけどな。）

「ね？」

にっこり笑ってやると、アシュリーは一瞬目を丸くした。が、ちゃっかり書類を奪還だっかんしたかと思うとぱっと身を翻して部屋を出て行った。

（……………なんか、ガキみてえ。）

小さな子供が急ぎ足で駆けて行く。周りの大人達は微笑んで、いつも通り道を開けてやる。

子供は大魔術師の回廊へやってくると躊躇い無くその扉を開き、入る。そのままの軽い足取りで奥へと進み、絵が沢山飾られた部屋へ入ると、目当ての絵を見つけて駆け寄り話しかけた。

「しるべ”よ。主のもとへしもべをいざなえ。」

すると絵の人物は子供に手を差し伸べる。子供は素直に手を差し出し、絵は子供の手を取り、回廊の主の元へと誘った。

「ニルさま!」

幼い声が主を呼ぶと、ニルは愛おしそうに声の主を迎えた。

「お帰り、ユンファ。」

「ただいまもどりました!」

ユンファと呼ばれた子供が駆け寄れば、ニルは優しく抱きとめた。

「あの、アスさまが来るみたいです。」

困った顔でユンファが言うと、ニルは笑った。

「やっぱりね。あの男の事だから、絶対文句言いにくと思ったわ。」

そう。予期していた事なのだ。

気難しくて面倒くさがりの彼の事だ。助手なんて要らないと、それはもう不機嫌な顔をしてやってくるだろう。

「ニル！」

ほら。

噂をすればなんとやらだ。ユンファがさっとニルの後ろへ隠れた。

「あら、なあに？すごい顔ね。」

ニルは笑いを堪えながらぬけぬけと聞いた。

「なにじゃない。これはどういう事？」

転移方陣から現れたアシュリーは、予想に違わず思い切り不機嫌な顔をしていて、ニルは大笑いしそうになるのを堪えた。
差し出された書類の内容を分かっているながら見直してみる。

「：貴方の助手の契約書よね。これがどうかした？」

「どうかしたじゃない。なんで勝手にギルドに依頼なんかするんだ。」

「今更どんな文句言ったって無駄よ？もう契約済みなんだから。」

「俺は同意してない！」

ぐっと拳を握りしめてアシュリーは怒鳴った。ニルは慣れたものだ。

「忙しそうだから気を使ってあげたんじゃない。それに助手でもいなくちゃ、貴方の回廊って足の踏み場もないじゃないの。」

「気を使っただって？有り難迷惑って言葉知ってる？それに君は転移方陣で来るんだからあんなところは通らないだろ？」

「貴方に用があるのは私だけじゃないでしょう？それに貴方の部屋ときたら、キノコでも生えそうよ。あれは衛生上良くないわ。」

「君が助手になるわけじゃないんだから関係ないだろ！」

「怒鳴るものじゃないわ。ユンが怖がってるじゃないの。」

わざと大きな溜め息を吐き、わざとユンファを優しく撫でる。それを見て予想通り少し勢いが落ちたものの、アシュリーはしつこく抗議する。

「とにかく助手は要らない。君の書術なんだから君が破棄させて。」

「もう契約成立なのよ。陛下も了承済みなのよねえ。破棄させるなら貴方が陛下に申告してくれない？ 貴方の助手の事なんだし。」

「俺は同意してない。なのに君が勝手にやったんだ。君が破棄させるのが当然だろ？」

「私が言ったところで陛下は本人を連れて来いとおっしゃる筈よ？ どうせ貴方も行く事になるの。」

「どうして俺が！ 悪いけど君が引き起こした事態に俺が付き合う義理はないだろ？ あの助手を連れてさっさと破棄してきて。」

強情なアシュリーらしい。これしきでは引き下がらないか…そう考えて、ニルは大仰に呆れてみせた。

「貴方って人は！ 可愛い女の子を路頭に迷わせるの？」

その台詞に、一瞬固まるアシュリー。

「な、し、知ってて…！？ …いや、そんなの関係ない！ とにかく俺には要らないんだから！」

「女の子がギルドで指名手配者を追うのは普通だって言うの？」

「そ、そんな事言っていないだろ？俺は」

「そうやって生きてきたんだから死ぬまでそうしろって言うつもり？」

「だからそうは言っていないだろ！」

「じゃあ助手くらい認めてあげなさいよ。」

「いや、だから…だったら君の助手にすればいいじゃないか。」

「私にはユンファっていう助手がいるもの、ねえ？」

にこりとユンファに微笑みかけると、心底嬉しそうに微笑み返してくれる。この無邪気な笑顔が、ニルには必要なのだ。そんなユンファを、アシュリーは複雑そうに見つめた。

「助手っていうより…」

「だからね、彼女は貴方の助手なの。ね？分かるでしょう？何も四六時中一緒にいるとは言わないわ。普段はあの回廊で、お互いに好きに過ごしていればいいのよ。ね？そして、仕事へ行く時は連れて行くだけでいいのよ。ね？これだけの事よ。」

「……………」

悩み始めたアシュリーに、決め手とばかりに笑んだ。

「それに彼女は弓術士よ。賞金稼ぎしていた期間も長いし、貴方の苦手な体術を補ってくれるわよ。もう不意打ちで情けない姿を晒さずに済むじゃない？」

「……………！」

羞恥と怒りで言葉をなくすアシュリー。身体がぶるぶると震えている。

「ね？分かったら早く戻って契約書の書術を完成させないと、確実に陛下からお呼びがかかるわよ？」

「……っ！」

契約の書術は、一番最後の段階を残している。それを長く放っておくと、城の魔力に歪みが生じて守りに影響を及ぼしかねないのだ。悔しさも加わってニルを直視出来ないアシュリーは、やがて黙ったまま、足音荒くニルの部屋を後にした。

「………」

「…ニルさまあ…」

「な、なあに？」

「……：ユンファはこわかったんですけど…：ニルさまはたのしかったんですか？」

「すごく！！！」

言ったかと思うと、ニルは声を上げて笑い出した。

「あ、アシュリーったら、本当に、面白いわ…！あんな屁理屈で、一生懸命考えるんですもの…！」

しばらく不安げにニルを見ていたユンファだが、やがてつられて笑い出した。

「…：ニルさまがたのしかったなら、ユンファもたのしいですっ！」

「いい子ね、ユン」

ぎゅっと抱きしめると、小さな手が懸命に抱き返してくる。その仕

草が愛おしくて、ニルは切ないくらいに安らぎを感じていた。

「納得いかない！」

ばん、とアシュリーは机に八つ当たりをする。フィフィはそれを黙って見やる。

この大魔術師、戻ってきたと思ったら、もう三十分くらいはこうして考えては八つ当たり、を繰り返している。

最初は適当な所で諦めさせようと思っていたフィフィだが、アシュリーの行動がどうにも子供っぽく、呆れてしまった。

（これでも大魔術師だもんなあ。あんまり早く才能が認められたから甘やかされたんだろうな、きっと。）

勝手にそんな事を思って眺めている。

あくびをかみ殺し、部屋を眺める。

アシュリーをまた見る。

あくびをする。

部屋を眺める。

それにも飽きてくると、やる事はひとつだろう。

「……はあ…もうこうなったら、なんとか契約破棄の条件を満たすようにしないといけない。」

そうようやく決意して振り返ると。

(ん?)

穏やかな寝息をたてるフィフィの姿がそこにあった。いつの間にかウェスペルが、好奇心も露にフィフィの寝顔を覗き込んでいる。

「……………」

穏やかな光景だ。こうしてみると、さすがに女に見える気がする。

「……………」

(なんだってギルドなんか?)

大きな屋敷の奉公くらいは、大抵の娘ならやっているのに。

(そして、どうして助手なんか?)

本当に安定した高収入の為だけなのだろうか。怒りや不満をひと時忘れ、アシユリーは珍しい来訪者に思いを巡らせた。

くすくす、と笑い声が聞こえた。眠っていた自分に気づき、重い瞼を無理矢理開ける。

「……………」

(あれ?…ああ、ここ…城か。いくら敵がないからって、熟睡し過ぎたな。)

んー、と思い切り伸びをして、部屋を見回す。部屋の灯りは灯ったままだ。

(…ほんと、本が多いな…本棚があるのに殆ど外に積んであるし…)
そう言えば、と思ってアシュリーを探すが、あいにくこの部屋にはいないようだった。

(もう一つ部屋があるみたいだったよな…)
その扉を探す際、ふと気付く。

「あれ？」

(そういや、ここって地下だっけ。)

窓がないのだ。

(これじゃ時間がわかんねえな…ここへ来たのが昼間だったから…
夕方か夜か…)

窓がないと分かっている、ついつい見回して探してしまう。だが、無いものは無いのだ。

フィフィは立ち上がって部屋の探索を始めた。主がいないのだから、暇な事この上ない。それに、仕事内容がはっきり分からないのだから、何もしようがない。

「どれどれ…」

まずは机の上を調べる。大きめの木の机だ。その上には灯りを灯す不思議な球体。ペンと、インク壺。元は立派な机なのだろうが、こ

ここにも本が散乱していてアシュリーが突っ伏していた辺り、そしてフィフィが寝ていた辺りしか片付けられていない。

「……………」

そのままにしておく。

部屋は広く、天井はとても高く、そこへ伸びるように背の高い本棚が並んでいる。

（あんなに高い所にあって…あいつに本が取れるのか？）

考えてみて、軽く頷く。

（大魔術師なんだから、取れるか。）

取り合えず部屋中を見て回ろうと思い…本で身動きが取りづらい事この上ない。という事態に気付く。

「…………まあ、仮にも助手なんだし。片付けても文句言うなよ。」

今まだいない主に言い捨て、フィフィは片付けを開始した。

その頃、アシュリーは回廊を出て、城の廊下を考え事をしながら歩いていた。

（契約破棄の条件は…身元、仕事の態度、人格、これらに著しく問題がある場合…それから…王族の不満を買う…あとは…くそ、俺が面接すれば済んだじゃないか！！ニルのやつ…！！）

そんなアシュリーを人々は避けて歩く。中には物珍しげにみる者もいるが、それもその筈、アシュリーはあまり回廊から外に出ない。それに加え、城に上がったのはわずか十歳の時。わざわざ王が隊を組んで迎えに行ったのだ。この国のみならず、他国でも噂となり、この世界でアシュリーを知らない者はいない。

そんなアシュリーだが、魔術を使う時以外は至って普通の若者であり、魔術以外の事には疎い。今も考え事に熱中している為、足下すらも見えていない。

この状況で真正面から来る人を避ける事は不可能だった。

「うっ…!?!」

顔から見事に激突し、ついでにぶつかった人物にがしっと抱きとめられた。

「なっ!?!?ぐ、苦しっ…」

「なにをやってるんだお前は。」

体躯の良い身体を無理矢理引き剥がし、アシュリーは慌てて顔を上げた。

「……なんだお前か…」

げんなりして言うと、相手は眉根を寄せて言い返す。

「なんだとはなんだ。友が悩んでいるようだったから声をかけてやったのに。」

「いつでも上から物を言うよなお前は。」

アシュリーの目の前にいるのは黒尽くめの男だった。長身の体に黒い服を纏い、黒いマントを羽織り、腰に下げた剣の鞘も黒ければ、髪も目も黒い。黒という色彩は近寄り難い雰囲気を作るものだが、加えてこの男は目つきが鋭く、自分が気に入った相手にしか口を開かない。ついでに言うところ、無表情。近寄り難い事この上ない。

「リディ。突然、お前に助手をつけるって言われたらどうする？」
アシュリーがそう訊ねると、リディことリディオスは顎に指をあて、しばし考えた。

「…そうだな…追いつく。」

なんとも簡潔だ。

「じゃあオルクスあたりが勝手にお前と契約させてたら？」

オルクスというのはリディオスの親友で戦友で上司である。

「……殴る。」

「俺の場合、それはニルだから出来ない。」

「なんだ。ニルヴァ？ナにそんな事をされたのか。」

「勝手にギルドに申請して、勝手に面接して、勝手に契約したんだよ！」

怒りに両手を握りしめ、力説するアシュリー。リディオスはそれを興味深そうに眺める。

「それで、助手を追い返したくて考えている訳か。」

「そうだよ！お前も考えてくれ！」

「殴り倒して放り出せばいいだろう。」

「…出来ない。」

「ああ、武術は駄目だったな。俺がやってやろうか。」

「いや！それは駄目だ！」

物騒な発言に慌てて止めに入る。

「…何故。」

「いや…その…あっ！」

慌てた次は考え込み、何やら閃いたようだ。

「そうか…！その手があった！」

そのままアシュリーは走り去って行った。

「……………唐突だな…」

残されたリディオスは一人ぼやき、何事もなかったかのようにまた歩き出した。

1041 (後書き)

書術……文字に魔力を込める呪術。書いてあるものには出来ない。

魔力を込めて書かれた文字は”書かれた場所、もの”に効力を発揮する。

例えば壁に書かれればベニヤでも鉄のような強度をもたせたり、重要書類に書き加えれば特定の人物しか見れないようにしたり出来る。

片付け（とは言っても散乱していた本を、本棚に沿って積んだだけ）が終わったフィフィは地下の部屋にいるのも飽きて、ここへ来た時に降りてきた階段を、今度は上がる。

消えていた階段の灯りは、フィフィが一段目に足をかけると再び灯った。

「この仕組みすげーよなあ…」

昇りきり扉を開けると、背後で一瞬にして灯りが消えた。

「すげー…」

感動しつつも地下を出る。そして、来た時に見かけた通路の扉を、一つ一つ開けてみる事にした。念の為にあの書類は持っている。

一つ目の扉を開ける。

「……………本棚？」

本棚が並ぶ部屋だった。

二つ目の扉を開ける。

「…台所？…埃だらけじゃねーか…」

もう何年も使っていない感じの台所だった。

三つ目の扉を開ける。

「…あいつ地下しか使ってないのか？」

またも埃だらけの部屋。小さな机と、椅子が数個置いてあった。

四つ目。

「わあ、廊下かよ…」

取り合えず閉める。

五つ目。

「……ただのただっ広い部屋か？」

かなり大きな部屋だ。しかし調度品は何もない。ここも埃が積もっていた。

その次はもう、回廊を出る扉だったので、先程の廊下へ続く扉へ戻る。興味本位で廊下を進んでみる事にしたが、若干不安に思っ
て扉は大きく開け放しておく。

廊下は必要性を疑うくらい短く、すぐに突き当たりの扉に行き当たった。

「また扉…」

ちらりと入ってきた扉を確認する。開いているのをしっかり見ると、目の前の扉の取っ手に手をかけた。

「っ!？」

まるで触れたのが分かったかの様に扉がひとりでに開いた。音もなく。開ききるとぴたりと止まった。扉から見える部屋は、いたって普通に見える。

「……………」

もう一度、最初の扉を確認した。

「……………どうするかな…」

ここを止めたとして、あの地下へ戻ってもする事がない。かと言って先程の道筋にある部屋は埃だらけ。もう日も暮れるだろうから、回廊の外へ出ても兵士に不審がられるだろう。よって。

「行くか。暇だし。」

フィフィは未知の扉からの誘いを受け入れた。

部屋は大きめで、壁には大きな絵が沢山飾られていた。どれも風景画のようだが、あいにくフィフィは芸術に興味はない。部屋を見回すと、奥へ続くアーチがあった。扉はついておらず、閉じ込められる心配も無さそうだ。アーチから覗くと、そこはこぢんまりとした部屋であり、大きな扉の様な窓と、大きめの寝台が置かれていた。他には何もない。

窓へ寄って扉を開けた。

「……………へえ…」

視界いっぱい広がるのは宵の空。藍色の空の下、地平線の際は暁色と水色の空がまだ残っている。そこだけ見ているとまだ明るさを感じるが、天を見上げればもう星が瞬いている。フィフィはこの、不思議な宵の空が大好きだった。

「良い場所だな…」

思わず頬が緩む。窓の外は充分な広さに張り出しており、フィフ

イはそこから下の様子を確認した。この部屋の外はどうやら中庭になっているようだ。今も見周りの兵士が見えた。

「…気に入った！文句言われる迄はここに居座ってやる！」

満面の笑みで一人頷き、良く整えられた寝台へ倒れ込む。寝台はフィフィを優しく受け止め、やがてその重さを受け入れる。

「あー…すっげえ良い気持ち…」

目を閉じれば仄かに…植物だろうか。良い香りがする。手探りで自身の装備を確認した後、フィフィは速やかに睡魔に身を委ねたのだった。

その頃、またも城内を小さな子供が走っていた。しかしこの時のユンファの表情はとても慌てていた。行き交う大人達も少し心配そうだ。ユンファとすれ違ったりディオスは、たった今自分の主から聞いた事を思い出し、密かに溜め息をついた。

「まったく…我が主は物好きだな…」

「“しるべ” よ！主のもとへしもべをいざなえ！」

慌てて人物画に叫ぶと、絵の人物も少し心配そうに手を差し出し、道を通した。ユンファは道から走り出て主を探す。

「ニルさま！たいへんです！」

さっと見渡すが主の姿は見えない。とっくに主の就寝時間だと気付き、それでもたった今聞いた事を伝えなければと思い、ユンファは寢室の扉に駆け寄ってそっと叩く。

「ニルさま：おやすみしてるのにごめんなさい。どうかおきてください……」

縋る様な声に反応したのか、又はまだ眠りが浅かったのか、ニルはすぐに扉を開けてくれた。昼間は結わえている髪を下ろしていて、そうするとまるで女神のように見えた。

「：ユン：どうかしたの？ 転ばなかった？」

ふわりと顔を包まれて思わずうっとりしそうになるが、ユンファは一生懸命気を引き締めた。

「はい！大丈夫でした。それよりニルさま、たいへんです！」

幼い助手の切迫ぶりに、ニルは微笑みそうになるのを我慢する。

「一体何？ 落ち着いて話してごらんなさい？」

「は、はい……」

言われた通り、ユンファは落ち着きを取り戻す為に深く呼吸をした。

「：たった今へいからの使いが来て：明日のごご、アスさまのじよしゅをしんさする“ごぜんじあい”をするそうなんです！」

(…そうきたのね…)

ニルは思わず舌打ちする。

(即刻解雇出来ないからって、もっともらしい理由を付けたのだわ…)

驚きと同時に怒りも湧いてくる。

(アシュリーの我が俤に悪のりしてるんだわ、あの方は…！)
「ニルさま…」

はっと我に返るとユンファが怯えた顔で見ている。

「あ…ごめんね…ユン。貴女に怒っているんじゃないのよ？」
そう言って抱きしめると、幼い手が縋り付いてくる。

「ちょっと…アシュリーにお仕置きしてやらないとね…」

物騒な言葉にユンファは慌てて主を見上げる。

「お、おしおきですか？」

「ええ、そうよ。あの馬鹿にはお仕置きというものが必要なのよ。
誰もが甘やかすものだから、ああいうひねくれた性格になるのだわ…」

言いながら小さな頭を抱しめる。その時のニルの目がちっとも笑っていないかったのを、ユンファは見る事が出来なかった。

そんな事も知らず、フィフィは朝の眩しい光に目を覚ました。

「…まぶし…」

ぼそりと呟いて布団の中に潜り込む。そうすると完全に日の光が入らないので、安眠出来ると言うものだ。実に心地良い眠り。フィフィは満足そうに溜め息を吐くと、再び睡魔の誘いに応じた。

そんなフィフィが見当たらない事を、アシュリーは喜んでいた。

（宣告は必須だけど：御前試合までに見つかれば問題無し。慌てふためいてボロ負けしてくれば文句無しだ！）

上出来、と呟いてうきうきと書類を進める。大魔術師といえど、仕事は魔術での応戦だけではない。国中の魔術に関わる問題と向き合わなくてはならないのだ。ペンを持つ手元にはウエスペルがいて、楽しそうに書類と主を見比べていた。が。

「!？」

急に部屋の温度が下がったような気がして、アシュリーは慌てて部屋を見渡した。

「あっ…」

あるものを見つけ、途端に青ざめるアシュリー。ウエスペルまで

もがさつと耳飾りに逃げ込み、震えている。

「な…なに…？」

必死に平静を装おうとするアシュリー。だがそれも氷の女神には通用しない。

「一体どういうつもりなの？」

腕組みをして冷気を発するのはニル。穏やかな口調がさらに冷気と呼んでいる。そんな威圧感に、アシュリーの虚勢はあつと言う間にひびが入った。

「ど、どういうって、何が？」

目を見れず、しかしかろうじて椅子から立ち上がる。

「シラを切るつもり？ 貴方が彼女にしようとしている仕打ちよ。」
「仕打ちなんて…必要な事だろ？」

そんなに必要だとは思っていないのが、目を合わせず縮こまっている事でバレバレだ。

「助手がどうして御前試合をしなくてはいけないの？ それも、負けたら即刻クビだなんて…」

「俺の助手が、ただのぼんくらじゃ困る。足手まといになるだけだし、迷惑なだけだ。そうだろ？」

「あら、じゃあ彼女が勝ったら助手は決定ってわけね？」

「そんなの、勝てるわけない。」

「……へえ？」

しまった、とアシュリーは口を覆ったがもう遅い。ニルの目はひととアシュリーを見据え、ちっぽけな罪悪感にぐさりと深く突き刺さった。

「勝てないって決まってるわけね。それをあの方に唆したわけ！」

そう言われ、アシュリーは必死に言い返した。

「ニルが言ったんじゃないか！ 体術を補うだろうって。だからそれぐらいの実力がなきゃ、絶対に認めないからな！」

意外な事にニルは反論しなかった。だが、次にした深呼吸がアシュリーの不安を煽る。

そして。

「……………分かったわ……」

低く唸る様な台詞。思わずごくりと唾を飲む。

ニルの抑えた態度に膨れ上がる不安。だが、それが分からない焦燥。

アシュリーは知らず、ニルを不安げに見つめていた。それを受け止めたニルが不敵な笑みを浮かべる。

「…今更そんな顔をしたって駄目。」

むっとして反論しようとしたが、先程とは違うニルの微笑に凍り付いた。

「節度が分からない悪い人には“お仕置き”よ。アシュリー」

??過去この言葉を聞いて、いい思い出になった試しがない。

ニルは凍り付いたアシュリーに一瞥をくれると、転移方陣を使わず、地下からの階段をずんずん昇って行った。

フィフィは心地良い微睡みの中にいた。ふかふかの寝台に、ふわふわの布団。静かな空間。

しかしそんな空間に何かが侵入してきたのを感じて、若干不機嫌になる。

（一体なんだよ？）

そう思っただけで、特に警戒はしなかった。

「起きなさい。フィアニス！」

（ん？）

凜とした強い口調。フィフィは僅かに瞼を持ち上げたものの、暗闇が現実へ向かう事を拒む。

（まあいっか。）

そんなフィフィに、女神の逆鱗が落ちたのは言う間でもない。

「起きろと言ってるのよ！」

「うわあぁっ!!?」

布団をはぎ取られただけならまだしも、身も凍るような冷気が一気に襲いかかってきたのだ。

「なっ…!?!?」

驚きに目を白黒させるフィフィに、ニルは容赦なく言い放った。

「午後から貴方は御前試合をしなければならぬわ。そして勝たなければ駄目よ。」

「……………はい?」

「返事は“はい”よ。何が何でも勝つのよ。もしくは方々に実力を認めさせなさい。いいわね。」

「待って下さい! なんの話ですか?」

「御前試合と言った筈よ? わたしが手を貸します。だから、勝ちなさい。」

「勝って…あー、御前試合? って、俺が勝てるようなもんなんですか?」

一瞬止まった。

「…だから手を貸すと言っているのよ。」

「ほんと待って下さい。大体何の為に?」

嫌な予感がする。

「貴方の主の我が俤よ。後はそれを面白がっている方々の要求よ。」
「俺は恰好の暇つぶしですか。」

「自覚したなら良い事だわ。もう時間がないの。さっそくわたしの

回廊へ来なさい。」

「いやいやいや！俺はしませんよ！？要するにたかがギルドの賞金稼ぎじゃ勝てない試合なんですよね？」

そう言ったフィフィに、ニルは真剣な面持ちで近付いた。そして、ゆっくりと言葉を発する。

「……いい？これはもう、決定事項なの。勝つ覚悟を決めなさい。勝てなければ貴方は…即刻クビよ。」

「……………は？」

「さ、行くわよ。」

「は！？」

「？アシュリー…ウィルレイユの力場において、我、ニルヴァ？ナ…ハディエスが道を紡ぐ。我は主の友なりて、誓いを共にするものなり。その誓約において我が力を許し給え？？」

歌う様な魔術の声音。それに誘われて視界は揺らいでいく。

事をしっかりと噛み砕いている暇もなく、フィフィは強制的に移動させられたのだった。

太陽が空高く昇り、闘技場を明るく照らす。観客席にはすでに沢山の人が集まってきていて、城の関係者の他に、貴族、そしてわずかに庶民の姿もあった。クライスト帝国では全ての民に平等に機会を与える??例えそれが貴族でなくとも。

さて、今回の御前試合は少し様子が違うようだと、人々は興味深々に時を待った。どうも“あの”ウィルレイユに何者かが付くらしい、と。

??公に御前試合をするとなると…かなりの腕前と考えていいだろうな。

??いやいや、噂ではどの出かも分からない者を叩き出す為らしいぞ。

??そんな事より、運が良ければ滅多に公衆へ姿を見せないウィルレイユ様を拝見出来るのよ。

観客がそんな話に盛り上がっている中、王族の付近にいる者達は複雑な面持ちをしていた。ひそひそと話をしているのは、リディオスとオルクスだ。

「この御前試合の理由を聞いたか？」

リディオスが闘技場を見ながら話しかけると、オルクスも闘技場から目を逸らさずに答えた。

「ああ。」

「アシュリーが強行したから、ニルが裏で何か仕掛けてくるだろうな。」

「そうだな。」

「肝心の弓術……今朝ニルが連れて行ったそうだ。」

「……条件が変わったな？」

「ああ。ニルが陛下に進言したらしい。」

負けたら即クビ。という条件だったのが、負けても王族やリデオス達が十分な実力であると判断すれば、フィフィは助手として認められるのだ。

「認めるか、否か？」

「……」

オルクス問いに、リデオスは妖しく笑う。

「それは、あの者次第だな。」

その頃、闘技場の裏では??。

「本当にこれで大丈夫なんですか？俺、勝てる気がしないんですが……」

「私が授けたのよ。失敗はあり得ないわ。」

「いや、勝てるか聞いたんですが……」

「いい？負ければ即刻クビなのよ。何度も言ってるでしょう？」

「いやけど……」

「つべこべ言っていないでしゃんとなさい！注意する所をしっかり抑えておけば大怪我はしないわよ。」

「本気でやらなきゃいけないんじゃないですか！何が“儀礼的な試合だから怪我の心配はない”ですか！」

と、ファイファイとニルが騒いでいた。

闘技場にファンファーレが鳴り響く。白鳩が晴天の空に舞い、観客席から歓喜の声上がる。

「ああ…始まったよ…」

ファイファイが情けない顔でそういうと、傍らのユンファがにこりと笑った。

「大丈夫ですよ！全力でにげつつ、やる気ですってください！」
「…お前の“やる”って言葉が物騒に聞こえるのは気のせいだよなきっと。」

小さなユンファはニルの助手らしい。見た目に変わらず中身も幼いと思うが…しかし、聞いた限りでは、戦闘ではそうとう強いらしいのだ。

（こんなちっこくても強いんだもんなあ…。俺、思いっきり場違いな気がしてきた）

溜め息をつく、小さなユンファが心配そうに覗き込んでくる。そうされると、思わず安心させようと笑顔を向けてしまうのだった。

『では、弓術士ファイアニス！御前へ！！』

「え、もう!?!」

慌てるフィフィにユンファは精一杯応援する。

「さあいってください! アシュリーさまにおしおきです!」

「この相手はアシュリーじゃないだろ!」

げんなりしつつ、大歓声の中に足を進める。

一步白煉瓦の上へ足を踏み出すと、闘技場に集まったかなりの数の観客を確認できる。

(まじでやるんだよな…一試合限り。…で、誰だ?)

闘技場の舞台へ上がり、試合相手を探すフィフィ。だが誰も上がってくる様子はない。

(あれ?)

そう思った直後、信じられない言葉が聞こえた。

『この度の御前試合、太子たつての願い入れにより、太子自らが弓術士の実力を測る事となりました!』

どっと蜂の巣を突いたようなどよめきが広がる。それは王席の周りでも変わらない事だった。

「えっ…？殿下がお出になる…？」

驚くニル。横を見るとアシュリーまで驚いていた。

（殿下自ら…？まずいわ。あの方は“戦神”だもの…もう！公平な条件をと進言しただけなのに！）

ちらりとオルクスとリディオスを見ると、視線を闘技場から逸らさない様になっているのが分かった。ニルは確信を持って問う。

「…お二人とも…御存知でしたね？」

「…我々は主に忠実だ。他言無用。」

「……………」

オルクスの若干楽し気な声に、無表情で頷くリディオス。ニルは複雑な思いで闘技場のフィィィを見つめる。

（…：殿下直々にお相手下さるなら、わざわざ派手な戦い方をして興味を引かせる必要は無くなったわけだけど…大丈夫かしら…瞬殺されるような事はないわよね。まあ…どうやら度胸は座っているし、大丈夫よね？）

一抹の不安を覚えるニルをよそに…。

（は！？太子って…どーすんだよニル様！！）

フィィィはもう動揺しきっていた。そんなフィィィの前、対面す

る舞台に一人の青年が上がる。すると割れんばかりの歓声が上がり、思わず耳を塞いだ。

（すっげ…王太子は人気者だな…）

顔を若干顰めつつ相手を見やる。そして、その手に持つ、あまりにも不釣り合いな武器に目を止めた。

（まじ…？）

太子の噂は聞いていた。外貌は白い肌に黄金色の短く波打つ髪。切れ長の瞳は豊かな大地の色。そんな外貌とは裏腹に、太子でありながらオルクス、リディオスにも引けを取らない腕を持つ。戦う姿は戦神と例えられる程だという。

（それにしたって、あれは…ちょっと無理があるんじゃない…）

美しき戦神の手には、巨大な斧。身の丈程の。肩に担いでいるところを見ると、見た目と違いあまり重量はないのだろうか。太子の足取りも重さを感じない。

（もし見た目通りの重量なら、あの細腕じゃ満足に扱えないだろうし、見た目程の重量がないなら威力は小さい。ああいう類いは振りかざして使うから…まだ勝機はあるか…？）

そう吟味していると、当の太子から声がかかる。

「先手をやろう。」

「え？」

言ったきり、太子はフィフィを見据えて笑んでさえいる。

（なめられたもんだな…。実力は否定しねーけど、腹立つ。）
「じゃあお言葉に甘えて。」

そう返すと、太子は軽く頷いた。それを受けて闘技場の銅鑼が鳴り響く。フィフィは迷わず床を蹴った。

思い切り床を蹴り、低く跳躍しながらフィフィは行動を決めていた。

（…見た目がどうだろうと“戦神”と異名を持つ程だ。様子見なんてしてたら負けるのは確実。なら……？）

床を再度蹴り、太子の懷に転がり込む。フィフィが銅鑼の合図とともに床を蹴ってから太子へ一撃を繰り出すのに、一秒もかからなかっただろう。その早さに闘技場全体が息を呑んだ。しかし、驚愕したのはフィフィの方。

（まさか…）

太子の鳩尾を狙って繰り出された右足は、当たるところか掠りもしない。冷や汗を感じつつ気配を追って視線を動かせば、太子は舞台の中心に降り立ったところだった。？？軽やかに。

（あんな大斧持って、こんなに早く動けるもんなのか!?!）

フィフィの動きを予測していたから動けたのだろうか。なんにしても最初の一撃が外れたからといって次の手を考える余裕などあっ

てはいけない相手だろう。フィフィは困惑しつつも気を引き締め、直ぐ様太子を狙って弓をつがえて矢を放った。

僅かに動いてそれを交わした太子は、フィフィに笑う。

「弓術士が始めに蹴りでくるとはな。一人で戦う事に慣れているとみえる。」

その間にもフィフィは近付いて、確実に太子を倒そうと攻撃を繰り出す。

「当たり前だ！」

近付いては体術を仕掛け、距離を取っては、弓をつがえる姿がはつきりと確認出来ない程の早さで矢を放つ。

（ちっ：隙がねえし、何より：）

太子は避けるばかりで一向に反撃の素振りが無い。その顔に笑みが浮かんでいなければまだ、勝機を感じられたかも知れないが。あいにく太子は不敵な笑みを浮かべていた。

（油断ならねえな：余裕なのが見て取れる。）

背後に回って蹴りを繰り出すも、また避けられる。

再び距離を取ろうと後方に跳躍した、その時だった。

（なっ：！！！）

一瞬前までなんの素振りもなかった太子が、フィフィを追ってき

ていた。その、激しい程の気迫。強い眼光。振り上げた斧の柄がフイフィを狙う。

?? 捉えた。

そう、目が言っている。

（油断してた：！）

繰り返される単調な攻防に、知らず慣らされていたのだ。迫る、衝撃の時。フイフィは渾身の力で斧の柄を捉え、自らの体を、その軌道から逃す。

舞台の床、岩を砕く音。と同時に体が床に投げ出され、勢いで床を転がった。急いで身を起こせば、少し先に大きく砕けた床と、大斧を肩に担いでこちらを見ている太子が見えた。

「：はは、見た目通りの斧じゃねーか：」

思わず口をついて出た言葉に、太子は軽く笑った。

「油断していた割にはよくやる。だが、その程度では認められんぞ。」

「……………」

太子は沈黙するフイフィをしばし見やり、すぐに動いた。はつとした瞬間には頭上で斧を振りかぶっている。

（くそ！）

体勢を立て直す暇もなくその場を逃れる。しかし先程までとは打って変わり、太子はフイフィを追いついて始めた。

(まずいわ…)

ニルははらはらしながら試合を見守る。

(忘れてるんじゃないでしょうね？この私がわざわざ指導したというのに。ユニにも手を貸してもらっているのよ？)

焦りで頭が回らないのだろうか。だとしたら。

(……その程度だとしたら、私の目は衰えたのだわ。)

ニルは複雑な思いで舞台を見つめる。

思い切り水平に振りかぶられる斧。フィフィは屈んでそれを避け、太子の腕目掛けて蹴りを繰り出す。斧を持つ手元を狙ったそれは、半回転して避けられ、逆に太子の蹴りをくらう。からくも両腕でそれを受け、フィフィは後方に吹き飛ばされた。身を捻って無事に着地したものの、太子はもう走り出している。

(あたしは獲物か…)

爛々と輝く目がそう言っている。

(まさに戦神か。あんな大斧持って軽々と動き回られちゃあな…)

離れた距離から一足飛びで接近してくる。それを見ながら、フィ

フィは行動を決める。

（持久戦はあんまり得意じゃねーんだよな…やってみるか。）

その為に女神にしごかれたのだから。

頭上から降り立つ戦神に片手を向ける。くすり、と笑ったのが分かった。

??やってみろ。

そう、言っている。

（やってやるよ！）

「エウエラの加護を！」

そう叫んだと同時に斧が振りかぶられる。僅かな距離と時間を稼ぐ為にかがみ込み、万一の為に弓をつがえた。

??その時。

「……………まさか…魔術…？」

呟いて、アシュリーはもう一人の大魔術師を見た。彼女は満足そうに舞台を見ている。

（まだ人を見る目は衰えていないのだわ…）

頭上から助手候補者を追撃していた太子は、降り立つ直前に体勢

を崩した。観衆があつと思つた次の瞬間、着地場所にいたフィフィは大きく後方へよろめいた。

（いって…）

着地体勢を崩した太子が、構えていたフィフィに蹴りをくらわせたのだ。それを受けた左腕を気にしつつも、太子へ向けて矢は思い切りつがえてある。対する太子も、大斧を構えていた。しかし、お互いにびたりと狙いを定めたまま動かない。

「……………一体どうなってるんだ…？」

呟くアシュリーに、友は囁く。

「二人共相手の間合いにいるのだ。あれでは動けん。」

動けない、という言葉に訝し気な様子のアシュリー。太子は”戦神”だ。間合いなどあまり意味を為さない筈。するとリディオスは戯けたように肩をすくめた。

「普通なら。」

「じゃあ……………」

言葉の意味を察したアシュリーは若干嬉しそうに言うが、リディオスははっきりと言いつ切った。

「それをしないのは、これが“御前試合”だからだ。ここは戦場ではないからな。」

「……………!!」

絶句するアシュリーの横で、ニルがさも嬉しそうに笑っていたのは言う間でもない。

(くっ……いてえ……もうもたねーかも……)

先程から左腕が震え始めている。今はまだ狙いを定めていられるものの、あと数分したらぶれてくるに違いない。どうしようかと考え始めた時??

(ん……?)

太子が笑んだ。

今までとは違う雰囲気、フィフィは注意深く相手を観察する。すると相手は戦闘態勢を解き、フィフィに背を向け、王席へ向けて歩き出したのだ。

「は…?」

戸惑いつつもしばらく太子の背に狙いをつけていたフィフィだが、次に太子が行った行動に啞然とした。太子はいきなり立ち止まると、王席へ向けて声を張り上げたのだ。

「国王陛下。ただ今の手合わせにおいて、私ヴィルジウスは、弓術士フィアニスは大魔術師アシュリー・ウィルレイユの助手兼護衛として、十分な実力があると判断致しました。我が名を持ってこれを誓います。」

言い終えると優美な礼をとる。観客席からはどよめきと拍手が

送られているが、フィフィは啞然としていた。

（クビはなしかな……？）

本当なら嬉しい筈だが、あの太子自らがそう宣言する事に、なんとも言えない不安が沸き上がった。たった今数分戦っただけだが、相手の性格はなんとなく分かるものだ。

そんなフィフィには目もくれず、太子は舞台を下りて行く。どよめきは拍手に変わっており、太子に認められたフィフィには割れんばかりの拍手と喝采が注がれている。

いつまで立ってもぼうっとしているフィフィを見兼ね、兵士が退場を促した。舞台の裏で待っていたのは、大魔術師の幼い助手と、屈託ない笑顔の女神だった。

「よく頑張ったわね。これで貴方のクビは守られたわ！」

「はあ…」

「でんかのたいせいをくずすなんて、そう出来ることじゃないですよ！」

「はあ…」

ニルとユンファは一斉にフィフィに抱きつく、じゃあ一度城へ戻って支度なさい、と言って去って行った。

「はあ…」

まだ不安は拭えない。本当にこれで危機は去ったのだろうか。そう考えていると、またも見兼ねた兵士が闘技場の外へフィフィを誘導した。そこで数人の女性に引き渡され、促されるまま城へ戻った

のだった。

城へ戻り、回廊に戻るのか思いきや、フィフィは女性達に連れられて城の一室に来ていた。城内の構造が分かっていないのだから、城の一室、としかいいようがない。

「さあ、では本日はこちらの部屋をお使い下さい。」
「え、ここ？」

思わず問い返したフィフィに、女性達は目配せして笑う。

「フィアニス様が女性だと言う事は聞き及んでおりますわ。ですから、そう仰る気持ちも分かりますけれども、男性に不用意に近付く事は本来はしてはならない事です。特にこの、城の中では。」
「は？」

なんでフィフィの性別を知ってるんだと思ったが、それよりも台詞の内容が気になる。

「ですから、正式なお言葉を頂くまではこちらの部屋をお使い下さいませ。」

「いや、何が不用意なわけ？ここにいろと言われたらここに居るけど、変に勘違いされちゃ困る。俺があいつの側にいたいと思うわけないだろ？」

まあ、と女性達は笑ってしまいうくらい同じ動きをする。

「あら、アシュリー様に憧れる女性が多いんですよ？」

「何もお感じにならない？」

「呆れはしたけど。」

「呆れるですって！一体何に？」

「まさかアシュリー様から何か言われたんですの！？」

「いや、行動が…」

「「行動！？」」

「………」

明らかに言葉を都合良く解釈している女性達に、フィフィは若干怒りをもって言い置いた。

「ちょっと聞け！俺はそういう話に興味ねーから、騒ぎたいだけなら俺がいない所でやってくれ！！」

「「「………」」」

啞然として見つめる女性達。ちょっと言い過ぎたかと思ったが、女性達は声をあげて笑い出した。

「なあんだ、そうでしたの！」

「フィアニス様が女性だと知らされた時はもう、アシュリー様が婚約相手を留め置くのと思いましたわ！」

「なんでそうなる！？」

「だってアシュリー様だったら女性に興味がない…というか、もしかしたらお嫌いなようでしたので、そんな方が女性を側に置くとなれば…ねえ？」

「……極端だな…っ」

「ともあれ、フィアニス様が恋愛に興味のない方で安心致しました。」

「

心から嬉しそうにそう言われると、フィアニスは居心地の悪さを感じた。そんな事で嬉しそうにされても。

「あ、申し遅れました。わたくし達は明後日までフィアニス様のお世話を命じられております。どうぞよしなに。」

そう言った女性達はみな楽しそうに笑いあい、その純粹さからか、表情が幼く見える。

（可愛いなあ…）

フィフィは彼女達に強く好感を持ったのだった。

「ところで、先程の試合で殿下に何をなさいましたの？」
「何って？」

聞いた所で侍女達はフィフィに詰め寄る。

「殿下の体勢を崩した時ですわ！」

「戦神とも呼ばれる御方に何をしたんですの？」

「もしかして魔術をお使いになるんですの？」

畳み掛ける彼女達に、苦笑いで答える。

「いや…ニル様に教えて貰ったんだよ。それで、この図形をくれて…」

手を差し出すとここぞとばかりに覗き込んでくる。

「まあ…これは…」

「あら…ニル様がこれを…」

「良いものを頂きましたわね」

微笑む侍女達に、今度はフィフィが問いかけた。

「知ってるのか？これがなにか」

「まあ。御存知ありませんでしたの？」

「フィアニス様はこちらの生まれではありませんの？」

「これは大魔女“エウエラ”を繋ぐ図形ですわ。」

???クライスト王国ウル暦53年。公式には発表されていないが、王国の誇るもう一人の大魔術師に付き人が付いた。大魔術師の名はアシュリー＝ウィルレイユ。付き人は助手兼護衛を任じられた、フィアニスことフィフィ＝ルセ。

弓術を操り、後にエウエラの絶対的な加護を受けたと語られている。

1061 (後書き)

ファイファイ、ようやく助手になりました…！

主人は認めてないけど (笑)

アシュリーの元へと戻ったフィフィに、正式に主人となったアシュリーはさも面倒臭そうに言い渡した。

「…主に関わる人達に紹介するから。」

「……はあ……」

表情から口調から雰囲気から、体全体以上のものから嫌がっている気配が感じられる。元から歓迎されてはいないが、こうもあからさまだと、怒りを乗り越して呆れてくる。

一言伝えたアシュリーは、そのまま黙って地下からの階段に足をかける。ちらりと振り返る動作から、付いて来いという意味だと悟ったフィフィも黙ってついて行く。

（観念してくんねーかなー…）

そう思うも、アシュリー相手ではなかなか難しそうだ。

アシュリーは地下を出てからは一度も振り返る事なく、（というか存在を忘れていないだろうか？）廊下をすたすたと歩いて行く。

歩いているうちにフィフィはある事に気付いた。

（…すっげえ視線。）

侍女らしき人達から官吏のような人達まで、誰もがアシュリーに叩頭しつつ、物珍しげにアシュリーとフィフィを見ているのだ。

（あたしは分かるけどなんでアシュリー様まで？）

一步、いや、五歩程前をゆくアシュリー本人は全く気に留めていない…というよりも目に入っていないようだ。

（この人：目の前しか見えないタイプか…？）

この予想は、アシュリーが2つ目の角を曲がる時に確信に変わった。

壁に激突しそうになったのだ。

激突しなかったのはアシュリーが珍しく我に返ったからだ、ただ出会って間もないフィフィにはそれが珍しい事だとは分らない。

（どんくさ…）

大魔術師として城に召し抱えられているアシュリーだが、いざという時役に立つのだろうか、フィフィはぼんやりと思った。

アシュリーがフィフィを紹介する為が一番始めに訪れたのは、鍛錬場だった。夜が開けきる前にも関わらず、とフィフィが訝しんでいると、鍛錬場に人影があるのに気付いたのだ。

（こんな朝早く…打ち合い？）

人影は二つ。激しい打ち合いの音が聞こえている。近づくアシュリーは足を止めず、何か呟くとウィスperlが鈴を鳴らすように身を振るわせた。その音が届いたのか、人影達は打ち合いをやめ、こちらを向いた。

（あ…）

弱い日の光に照らされ、その二人の正体が分かった。闘技場で見た二人だ。

ニルの教えでは、上から下まで黒尽くめの男がリディオス。淡い金髪に濃い肌の色、紺青色の耳飾りをしているのがオルクスだった筈だ。

「お前が早起きとはな。」

少し意地悪く笑ったのはオルクスだろう。王師軍隊長だと聞いて、勝手に初老だと思っていたが、若い。それになんだか剣士という気がしない。魔術師のような雰囲気を持つ男だ。

「仕方ないだろ…」

不服そうに返すアシュリーに、リディオスだろうと思われる男が無表情に言う。

「ニルにしてやられたな。」

「……！」

その言葉にショックを受けるアシュリー。それを見てオルクスは可笑しそうに笑う。

「やっぱり…ニルがあの方に出るよう言ったんだな！」

「それは違うぞ。殿下が出ると仰られたのだ。…それにしても、やり過ぎたのだ、お前は。あのままやれば陛下からお叱りを受けているところだったぞ。ニルヴァーナに感謝するが道理。」

諭すオルクスに反論出来ないアシュリー。

しばらくそれを眺めていたリディオスは、飽きたように先を促した。

「それで？」

「え？」

「後ろの弓術士は連れて歩いているだけか？」

「あ……」

おいおい、とフィフィは呆れる。本気で忘れられたのか。

「…俺の助手になったフィアニスだ。」

「よ、よろしくお願いします。」

（そんだけか！！）

という突っ込みが入れないのが歯がゆい。すると、オルクスが苦笑しながら付け足した。

「フィアニスは弓術士で、護衛も兼ねると聞いているが？」

「…そう。」

「そう言えばニルからエウエラに加護を授かったようだな。」

リディオスが言うところ、アシュリーは思い出したようにはっとフィを振り返った。

「そうだ！」

驚くフィフィの手首を掴むと、その手の平を覗き込む。

「なん…ですか？」

するとあとの二人も覗き込んで来た。

「あー？」

若干冷や汗混じりに問うフィフィ。

「正式な図形だな。」

「樹力じゆりよくが混ぜてあるな。」

「ニルはどういうつもりなんだ…？」

「どういう事になってるんですかね。」

フィフィのやや強めの口調に、オルクスは下から覗き込むようにして言った。

「エウエラに加護を受けている、という事だ。」

「は？」

全く分からず問い返すフィフィに、オルクスは楽し気な笑みで答える。

そして、フィフィから離れて本来の目的に戻った。

「挨拶が遅れたな。私は王師軍隊長オルクスⅡファイセラ。頻繁には会わんだろうが、よろしく頼む。」

「フィアニスⅡルセです。こちらこそよろしくお願いします。」

王師は、王直属の軍だと聞いている。それを、一見若く見えるオルクスが束ねているとは…フィフィは失礼にならない様に気を付けながら、つい眺めてしまう。口調や態度から充分な貫禄のようなも

のを感じるのだが、しかし、若いと思う。

「俺は黒騎のリディオスⅡローグだ。」

「フィアニスⅡルセです。よろしくお願いします。」

黒騎とは、太子の騎士だ。クライストでは古くから、王位継承者の為の騎士がいる。

騎士は必ず王位継承者から色を授かり、それを名乗る。ヴィルジウスの騎士は、黒を授かった。故に黒騎というのだ。

リディオスはニルヴァーナの教え通り黒尽くめだった。黒い髪、黒い鎧、黒い服、黒い靴。腰に下げている剣の柄、鞘までが黒い。所々銀の飾りがあるが、ほとんど目立たないくらいのものだ。

表情は動かず、口調も淡々としている。馴染みにくく、近寄り難い雰囲気があった。

「あとはルキセオードか？」

問いかけるオルクスにアシュリーはただ頷いた。それを見兼ねたようにリディオスが言う。

「改めてニルヴァーナとユンファにも紹介しておけ。」

「…分かってる！」

心底不服そうなアシュリー。リディオスとオルクスはそんなアシュリーを面白そうに眺める。

「ルキはどこにいる？」

「あいつならまだ部屋にいるだろう。」

「寝てるんなら後で…」

「お前と違って我々は早起きが仕事だからな。まだ部屋にいますと言っても、問題はなからう。」

「……………」

オルクスの言い草に、不機嫌に輪が架かるアシュリー。が、溜め息を一つして、それを抑えた。

「じゃあ…」

「ああ、ではな。我々も戻るとしよう。陛下がお目覚めになる頃だ。」

二人の元を去りながら、フィフィはアシュリーに言ってみた。

「…アシュリー様。」

「……………なに」

思いつきり嫌そうだ。

「助手がそんなに嫌なんですか？」

「……………いても仕方ない。」

「…ならニル様はなんで助手をつけたんでしょうね？」

「…そんなの、ニルが世話焼きだからに決まってる。」

（…もしかしてニル様…アシュリー様にお目付役が欲しかっただけ…か？）

そう考えて、フィフィはニルの不敵な笑みを思い出した。

（……………あり得るかもな…）

「…貴方の仕事内容を聞いても？」

するとアシュリーは若干驚いたようにこちらを振り返った。

「……………聞いてどうするの。」

「自分の仕事の参考になります。」

「……………」

始めて会った時からそうだが、フィフィにはアシュリーの反応するポイントが不思議だ。なんだか掴めない。

「……………魔術に関する問題の処理。」

「ですよねそれは分かるんで詳しくお願いします。」

「……………小さな問題は書面で解決法を返す。事の重大さによっては俺が直接行ったりする。呪薬を渡すだけの事もある。その場合は兵

士に受け渡しを頼む。…くらいかな。」

「…なるほど、分かりました。ありがとうございます。」

「……それで？」

「はい？」

「それで、今言った事に対して、何をするつもり？」

（…驚いた。意外としっかりしてそうだな…）

こんな形でも、アリュリーがフィフィに向き合ってくれるのが嬉しく思えた。

「そうですね…書面で解決出来る問題なら俺の出番はないでしょう。ですが貴方が出向く場合は…」

この城へ来てから初めて、アシュリーはまともにフィフィの目を見ていた。それが嬉しく思えて、思わず頬が緩む。

「全力でお守りします。」

迷いない言葉。真っ直ぐな視線。

フィフィの強い意志を感じた気がした。

「……………そう…」

それだけ言ってまたさっさと歩き出す。だが、ウィスペルが驚いて耳飾りから飛び出してきた。

さかんに顔を覗き込まれ、アシュリーはウィスペルを睨む。

「……なに？」

そう言われると、ウィスペルは納得したように二人を見比べ、耳飾りへ戻っていった。

「どうかしましたか？」

「……………何も」

それだけ言って、前を向いて歩き出す。フィフィは首を傾げつつもついて行った。

階段を上がって城の二階となる部分へ行く。今度はしっかり周りを見て歩いている様子のアシュリーは、どこにもぶつかる事なく目的の部屋へ辿り着いた。

他の部屋の扉より少し立派な、しかし、どこかさっぱりとした装飾の扉を叩くと、中からはっきりと返事が返ってきた。

「ルキ、アシュリーだ。今いいか？」

「アシュリー様？…お珍しいですね。」

すると、扉がゆっくりと開かれ、一人の青年が姿を現した。濃い緑の瞳が印象的な、凛々しさを感じる青年だ。早朝にも関わらず、着替えは済んでいると見えて、ファイフィは先程のオルクス言葉を思い出して関心した。武人は早起きなのだ。

「おや、そちらの方は…？」

穏やかだが意思の強そうな声音は耳通りが良い。

「今日から俺の助手になったファイアニスだ。」

「ファイアニス…ルセです。よろしく願います。」

「そうでしたか…ああ、御前試合は拝見させていただきました。殿下相手にあれほどの戦いが出来るとは、なかなか出来る事ではありません。尊敬致します。」

「いえ…試合じゃなかったら無事じゃ済まなかったでしょうけど。」

ルキと呼ばれた青年は、あの試合だけでヴィルジウスの力量をほぼ正確に量ったファイフィを、驚きも露に見つめる。そうされると、ファイフィも驚いて言葉が出ない。

言葉が続かない二人に居心地が悪くなったかの、はたまた部屋に戻りたいだけか、アシュリーは踵を返そうとした。

「じゃあ、紹介しに来ただけだから…」

「……さようですか。…フィアニス様。名乗りが遅れて申し訳ありません。私は王師、黒騎を除く全軍の指揮を任されております、従騎のルキセオードと申します。以後、お見知りおき下さい。」

ルキセオードの礼に、こちらも深く礼をして返す。アシュリーはさっさと踵を返して歩き出しているので、フィフィもそれに従った。

「…オルクス様も、リディオス様も、ルキセオード様も若いんですよね。クライスト城には優秀な若者が集められてるとか？」

そう問うと、アシュリーはなんでももない顔でさらりと言った。

「優秀だったのがたまたま若かったただけだろ。」

「そうですか。…若いと言えば、ユンファは最年少ですよねぇ」

「……そうだな…」

ふと、考え込むような声。しかし問いかけるとすぐに元の調子に戻った。

「ユンファはどうしてニル様の助手に？」

「…君は知りたがりだな。」

「知らない情報が多過ぎるのです。」

「俺は騒がしいのは好きじゃないんだ。」

「騒いではないいつもりですが。」

「……………」

フィフィの存在を無視する事に決めたらしい。ようするに不毛な言い合いも苦手というわけだ。

（苦手な事が多いよなあ…）

フィフィはちよつと心配になった。

「アシュリー様！」

呼ばれてアシュリーは足を止め、声の主を探す。すると兵士がこちらへ小走りに駆けて来ていた。

「どうかした？」

「はっ。ニルヴァーナ様より、フィアニス様を借り受けたいの伝言でございます。」

「……フィアニスを？」

「俺を？」

問い返すアシュリー達に若干戸惑いつつ、兵士は伝言を続けた。

「はっ……。なんでも重要な事柄だとか……」

アシュリーは一瞬フィフィと視線を合わせた。

「……行ってくれば？」

その言い方に反論しようと思ったが、先に兵士が声を上げた。

「では、御承諾の意をお伝えして参ります！」

「あっ……」

フィフィが何を言う間もなく走り去って行く兵士。アシュリーなど、すでに歩き始めている。

「……じゃーお言葉通り行ってきますねー」

思い切り投げやりな言葉をかけると、さすがにアシュリーが振り返るのが見えたが、フィフィはさっさとその場を後にしてやった。

ところで、まだ数日間の付き合いだと言うのに、ニルヴァーナという大魔術師からの呼び出しには何かあるのではないか、という不安が沸き上がってくる。そして、それが確信に近いものだというのが怖い。

（そうだな。まだ一週間も経ってねーじゃん……）
だというのに。

ニルがどういう人間なのか、大体分かる気がする。
先程の兵士に案内されてニルの回廊まで来ると、フィフィは目を
閉じて出来るだけ深呼吸をした。

「あれ？」

見ると、回廊の扉の前にニルの小さな助手がいて、こちらに手を
振っていた。

「ユンファ様。フィアニス様をお連れ致しました！」

兵士が敬礼をする様が異様だ。だが、その顔には柔らかな表情が
浮かんでいる。それに答えるように、ユンファも笑顔を返す。

「ごくろう様でした！ありがとうございます。」

もう一度敬礼し、兵士が去っていくと、ユンファは回廊の扉を開
いてフィフィを招き入れた。

「さあ！フィアニス様、どうぞお入り下さい！」

「あ、ああ…ありがとな、ユンファ。」

「あ、わたしのことはどうぞ、ユンとよんで下さい！」

純粋な笑顔が愛らしい。答えてフィフィも笑った。

「じゃあ俺の事はフィーって呼んでいいぞ。それに、同じ助手同士
なんだし、ユンのが先輩なんだからさ。敬語なんて使う必要ないっ
て。」

「せんぱいなんて…わたしはほんのこどもなんです…」

「歳は俺が上。助手歴はユンが上。ほら、同等だろ？」

そう言うと、ユンファは嬉しさいっぱいの顔を上げた。

「……！じゃあ、ともだちになってくれますか？」

“友達”という言葉に面食らうフィフィだったが、すぐに頷いた。

「そりゃもう、喜んで！」

「……ありがとう……！」

喜んでしゃぐ姿がまた、愛らしい。

（癒されるなー）

そんなウンファに手を引かれるのが、また癒されるのだった。

さて、そんなウンファの主が氷の女神（∴この一件からは俄然悪魔のように思うが）なのだという事を、本人に会うまでつかの間忘れてしまっていた事が悔やまれる。すっかり油断していて、ついつい話に適当に相槌を打ってしまったのだから。

「いらっしやいフィアニス。無事にアシュリーの護衛になれて良かったわ。」

穏やかな笑みに迎えられ、フィフィは促されるまま椅子に腰かけた。

「お陰様で。ありがとうございました。でもあれ」

「殿下の体勢を崩す機会なんてそうそう出来ないのよ？とても良かったわ。」

「それって俺の事を喜んでくれてるんじゃないかって殿下の」

「そうそう、アシュリーにはきついお仕置きになっただろうから、今後は貴女の事を認めざるを得なくなるわね。無理矢理追い出そうなんて考えないでしょうから、安心なさい。」

「……………ありがとうございます。」

ニルの笑顔と口調に完全に主導権を握られ、フィフィは口を出すのを諦めた。ニルの隣でユンファがにこにこ笑って話を聞いているのも、脱力を誘う原因だ。

「それでね」

ニルが楽し気に話を進める。なんだか無邪気に楽しんでいるように思えて、ついつい気が緩む。

何と言っても、まだ出会って一週間も経っていないのだ。

「アシュリーの事だから、貴女に城内の事や仕事について、積極的に教育や指導をするとは思わないのよね。どう？」

これには素直に頷いた。

「はい。今日はオルクス様、リディオス様、それと、ルキセオード様に紹介して下さったんですけど、名前だけ言ってもらって。助手は必要ないから要らないと言ってますし。必要ないと思われてるなら教えようとは思わないでしょうね。」

ニルは気持ちよく相槌を打つ。

「ええ、そうでしょうね。どうせふてくされているんでしょう。殿下やオルクス様にかかわれてるでしょうから。けど、何も分からないんじゃない、満足に助手も出来ないわね？」

何かひっかかりつつも、本当の事なので頷く。

「まあ、書類なんて分かりませんし、お出かけなら付いていくしかないですし……？」

「それじゃあ困るわよねえ。クライスト王国の大魔術師、その助手ともあろう者が、その恰好、その言動では、ね？」

ちよっと腹の立つ言い方だが、まあ、そういう見られ方には慣れている。だが確かに、フィフィがこれでは“どこにでもついていく”助手兼護衛という立場からは困るかも知れない。そう思い、フィフィは頷いた。

「はあ……どういふ事があるのか分かりませんし。」

「もちろん大魔術師ともなれば、様々な式典にも出席しなければいけないし、そういう時は、例え隣にいる事が出来なくても、側に控えていなければいけないわ。そう、衆目があるのだから、それ相応の身なりと言動を身につける必要があるわよね？」

ニルはユニファを見て微笑む。

「ウンだって正装をして場に出るものね？」

「はい！ニル様のおそばにいるのが、わたしのしごとですから！」
歓喜のオーラいっぱいユンファを見て、思わず微笑む。するとそれを狙ったかのように、ニルはフィフィに微笑んだのだった。

「だから貴女も、大魔術師の助手に相応しいものを身につけなくては、ね？」

ユンファの笑顔につられて頷く。

「……そうですね。それなりには努力しないと…」

ニルの笑みが変わった。それに気付いた時には、もう、遅い。

「では、今日から始めましょう。貴女の教育に当たる人を紹介するわ。」

「は？」

和やかな会話に流されていた自分に気付く。ニルの勝ち誇ったような笑みに、一気に冷や汗が噴き出した。

「どうぞこちらにいらして。」

「え？」

ニル達がいる部屋の奥の扉が開くと、そこには、一目で上流階級の育ちだと分かるような、上品で可憐で、凛とした雰囲気的女性が立っていた。

「こちらは今日、今から、貴女の教育指導にあたる、ハンスファルク家の御息女で、クルスティーユ嬢です。クルス嬢、この方がアシユリーの助手兼護衛の、フィアニスールセです。」

紹介された女性は、きりりとした目でフィフィを見ると、優雅な礼をしてみせた。

「クルスティーユハンスファルクと申します。僭越ながらフィア

ニス様の教育指導をさせて頂く事になりました。ぜひ、よろしくお願い致します。」

突然の事態に対応出来ないフィフィ。しかしニルは、容赦なく言った。

「名乗りを返すのが礼儀というものよ？」

「え？あ、でも…」

「ねえ？」

「……………フィアニスールセです……………よ、よろしく申し上げます…」

「さ、ではさっそく始めましょうか。クルス嬢、頼みますね。」

「はい、ハデイエス様。私にお任せ下さいませ。」

「は？え？」

ニルは戸惑うフィフィを無理矢理部屋から押し出し、クルスはフィフィの戸惑いに構わず、参りましょうとだけ言ってフィフィの前を歩き出す。フィフィはかろうじてついて行くものの、事態を整理するのには数分かった。

「随分急に決まったんですねえ？」

フィフィはニルの顔を思い浮かべながら聞く。急ではないに違いないと確信しつつ、いやそこまで強引じゃないだろうと信じたい。が、クルスはいたって冷静沈着に答えた。

「いえ、フィアニス様がこちらへいらしてすぐに、ハデイエス様からお話がありましたよ。」

「……………やっぱそうなんですネ…」

（あの人は小悪魔だな…いや、本性が。）

「フィアニス様には」

「は？」

何故か若干語気が荒いクルスの台詞に、フィフィは小首を傾げた。

クルスはきつ、とこちらを見据えて（睨んで？）言う。

「まず、言葉遣いを中心に学んで頂きます。歴史や情勢などは、後々やりましょう。」

「……………」

（なんか…初対面にも関わらず敵意を感じるな…）

フィフィは黙って彼女の後について行く。こういう理由の分からない怒りはつかない方がいいのだ。

そうやって大人しくついて行ったのだが、アシュリーの回廊まで来ると、クルスはぴたりと足を止め、フィフィに道を譲った。

「ん？」

わけが分からずに首を捻ると、若干苛立った様子で言われた。

「フィアニス様が先にお入りになって下さいませんと、私が侵入したと思われてしまいます。」

「そんな大袈裟な…俺が後ろにいるんだし。」

そう言うのと、クルスは信じられないとでもいうように目を見開いた。

「な……まさか、本気で仰られているのですか？それとも、私がそんなに嫌いですか？」

「え？」

（嫌ってんのはあんただろーに。）

ますますわけが分からない。さらに首を捻るフィフィに、クルスは何かを耐えるように一度目を伏せ、フィフィに言った。

「…どうかお先にお入り下さいませんか？大魔術師の回廊に印だけで入るような権利は、私にはないのです。」

（印……？）

そう言われてフィフィは思い出した。ここへ初めて足を踏み入れる時、あの兵士は“書類を持っているから大丈夫だ”と言った。そして、“だから危険はない”と。

（そうか……なるほどな。）

「すみません。…けど、俺が先に入ればクルス嬢も入れるもんなんですか？」

え、とクルスの目が言っている。無知をこれ程驚かれる事に、フィィは驚いていた。

「……フィアニス様には、まず回廊についてのご説明が必要ですね…。」

「頼みます。なんせアシリー様はかなりの面倒臭がり屋で、何も教える気がないもんですから。」

そう言った途端、クルスはフィィィを睨みつけた。

「御自分の主をそのように言うものではありません！ 貴方は、礼儀というものを知らないのですか？」

「……………」

本気で怒っている。フィィィは驚いて声も出ない。

「良いですか、フィアニス様。主を侮辱するような発言は、断じてしてはいけない事なのです。それに、貴方はギルドで働いていたようですけど、そこでの常識は通用しないものと思ってお下さい。ここはクライスト城。陛下の御元なのですよ！」

「……………はい…」

クルスは、フィィィを快く思っていない。それはフィィィの身元に関係していたのだ。

彼女はギルドの者を良く思っていない。本来ならば関わりたくないのだ。それがニルに頼まれ、受けるしかない悔しさと、フィィィの、忠誠心のかけらもない態度をプライドが許さないのだろう。

（この人は、自分に誇りを持ってる。）

地位の高さや育ちの良さにではない。自分の身分と、その意味に。

「…すみません。クルス嬢。まず回廊について詳しく教えて貰えま

すか？」

そう言うと、クルスは憤りを抑える為に一呼吸おいてから、説明をしてくれた。

「……この回廊は、ウィルレイユ様ご本人が定めた方だけを受け入れます。王族の方はもちろん、同じく大魔術師であるハディエス様も受け入れられます。定めた方以外が、万一この回廊に入ろうとすれば、すぐに魔術が働きます。」

一旦言葉を切り、クルスは少し恐ろし気に回廊を見やった。

「例外として、一時期のみこの回廊の出入りをされる方は、陛下を通じてウィルレイユ様に許可を伝えられ、印を渡されます。そして、その印を持っていなければ、回廊に入る事は出来ません。」

「助手は入れるって事ですネ？」

「もちろんです。常に大魔術師様のお側にいなければならないのですから。」

「で、そういう人と一緒なら、誰でも入れるって事ですか？」

クルスは少し考えながら言った。

「……いいえ。誰でもというわけではありません。印を持つ者で、尚かつウィルレイユ様かフィアニス様……その助手の方が一緒であれば入る事が出来るのです。」

「結構嚴重なんですね……」

「大魔術師は国の要。クライストの盾であり剣なのです。故にそれだけ、日々に危険が伴うのです。」

ここでフィフィは首を傾げた。

「…そんな大事な国の柱なのに、俺なんかが助手だからってこうも簡単に側にいれていいんでしょうか？」

そう質問すると、クルス嬢は驚いたようにしばしフィィィを見つめ、若干微笑んだように見えた。

「…そうですね…それだけ御自分の立場に責任を感じて頂けるのは良い事ですわね。……もちろん、フィアニス様を信頼なさって、陛下も助手とお認めになったのでしようけれど、まだまだ心から信頼するには当たらないとお考えかと思えます。」

「なら、俺がさっさと出入り出来ちゃっていいんでしょうか？なんか緩い気がするんですが…」

そう言うのと、クルス嬢は深く頷きながら答えた。

「ええ、ご安心下さい。大魔術師様には使い魔がいますから。」
「使い魔？」

言いながら思い当たり、ああ、と頷く。

「ウイスペルの事か！」

期待を込めてクルス嬢を見ると、若干困ったように眉根を寄せた。

「……？わたくしなどではウィルレイユ様の使い魔を拝見出来る機会はありませんから、ウィルレイユ様の使い魔がどのようなものなのかは、分かりませんわ。」

「あ、そうなのか…」

フィィィはアシュリーと出会う前に、まずウイスペルに会ってい

る。それに、ウィスペルはよく耳飾りから出てきてはフィフィの周りをうろちよろしている。だから滅多に見れない存在だとは思いいしなかった。

「ともかくも、例えばフィアニス様が、万一ウィルレイユ様に危害を加えようとさなる事があっても、使い魔がそれを防ぎます。」

「へえ……」

言われてフィフィは思い出した。出会った時、ウィスペルにはひどい目に会わされたのだ。思わず苦い顔でもしていたのだろう。クルス嬢は首を傾けて訊いてきた。

「……まさか、そのような経験がおりますか？」

「あ、いや……俺がこの城に来て初めてアシュリー様の回廊に入った時ですね。その使い魔が威嚇してきたんですよ。こっちはアシュリー様探してただけなんですけどね……」

まあ、とクルス嬢は心底驚いたようだ。

「不思議な事もあるものですわね……。もちろん書状か何かお持ちだったのでしょうか？ それなのにそんな事が起こるなんて……」

「アシュリー様が言うには、“城にはない気配”だったからじゃないかって言っていましたけど。」

「城にない気配……？ ギルド特有の気配でもあるのでしょうか……」

「俺にはさっぱり分かりませんがね。」

おどけて見せると、クルス嬢はくすりと笑んだ。その様はとても愛らしく、先程からのあまり表情の浮かばない様子とはまったく違った。思わず息を呑む程だ。

(……いつもああやって笑うのか？…同性でも可愛いと思うよな…)

「さあ、立ち話はこれくらいに致しましょう？フィアニス様、お先にお入り下さい。」

「あ、はい。」

どうやらクルス嬢のフィフィに対する心構えは、若干柔らかくなつたようだ。

回廊に入り、アシュリーを探して奥の部屋へ向かう。石の壁に扉が現れたのを見てもクルス嬢はさほど驚いた様子はなかった。おそらく魔術を見るのはそう珍しい事ではないのだろう。灯りの灯った階段を降りていき、突き当たりの扉を開ける。

と、アシュリーの側をうろついていたウィスperlが、一瞬で耳飾りの中へ戻っていった。ちらりとクルス嬢を伺うが、彼女は気付かなかったようだ。机に向かい、本に没頭している主に、フィフィは声をかける。扉からだど机にいるアシュリーは背を向ける形となる。

「アシュリー様」

「何？」

見向きもしない。取り合えず用件を言う。簡潔に。

「俺に先生が付きました。」

「は？」

耳慣れない言葉に、アシュリーは思いつき迷惑そうな顔をして振り返った。

「クルスティーユ嬢です。今日から俺に色々教えて下さるそうです。」

」

「クルスティーユルハンスファルクと申します。以後、お見知り」

「ちよつと待って。なんで？」

クルス嬢が丁寧にあやめる中、アシュリーはクルス嬢の方を全く見ようとせず、そう問いかける。その様子を覚悟していたとはいえ、クルス嬢はひどく悲しかった。だが、フィフィはそれに気付かなかった。

「ニルヴァーナ様からそう言われましたので。」

「…まさかその話だったの!？」

その慌てように、思わずにやけそうになる。

「ええ、そのお話でした。アシュリー様のお側にいるからには、色々勉強しないといけませんから。」

「なっ…また、ニルのやつ…!」

「まさかアシュリー様が俺に礼儀作法など教えてくれるんですか？」

「なんで俺が？別に知る必要もないだろ？」

「必要だ重要だとニルヴァーナ様は仰ってましたよ？」

「ニルはそういうのが大好きなんだよ。礼儀作法とか行儀作法とか。ああいうの。」

「まあ俺も、お城にお世話になるわけですし、せめて最低限の作法は身に付けておいた方がいいのかなーと思ひまして。そういうわけで教えて頂きますから。」

「ちよっ……」

言いかけ、アシュリーは少し考えて言った。

「……一応訊くけど、どれくらいかかる？」

「さあ、どれくらいでしょう…?」

振り返ってクルス嬢に訊く。彼女は軽く頭を下げたままで答えた。
「…フィアニス様にもよりますが、およそ三ヶ月、とハディエス様より仰せつかっております。」

「その間君の仕事はどうするつもり？」

答えたクルス嬢ではなく、あくまでフィフィに問いかける。

「あー：どうなんですかね。」

「またも振り返って訊く。クルス嬢は若干困ったように答えた。」

「詳しくは伺っておりませんが：一日、数時間頂ければ幸いです。」

「言っとくけど、俺は君をいちいち呼んだりしない。いい？」

「じゃあ誰か呼びに寄越して下さい。」

「だから、そういう事はいちいちしな：？」

突然、可愛らしい音が聞こえた。まるで鈴を一振りしたかのよう。クルス嬢も思わず目で探しているが、おそらくウイスペルだろう。その証拠にアシュリーは半眼で耳飾りの方を睨んで黙っている。

「……………」

ウイスペルと耳に聞こえない会話でもしているのだろうか。しばらく黙っていたアシュリーは、何か嫌な事でもあったのか、顔をしかめた。片手は腰、片手は顎に添え、何やら考えているようだ。

「あの一：？」

問いかけるフィフィに答えもせず、アシュリーはついには目を閉じて考えている。

（ウイスペル：か？…………どうしたんだろう。）

黙って見守っていると、今度は目を開けてフィフィを見つめ出した。

「え：なんですか？」

聞こえているのかいないのか。アシュリーは黙ってしばらくフィフィを眺めた後、しぶしぶといった様子で首を振り、深く溜め息をついた。そして、おもむろに耳飾りを外した。

「？」

フィフィとクルス嬢が見つめる中、ウイスペル入りの耳飾りを、アシュリーはフィフィに突き出した。

「これを身につけろ。」

（うわっ…めっちゃ嫌そう！しかも命令口調！）

口の端が動きそうになるが、必死に押しとどめる。

「…なぜですか？」

「……………いいから。」

（説明するの面倒臭いししたくないって、顔に出てますよー。）

思いながらもフィフィは取り合えず受け取った。

「……これ、どうやって付けるんですか？」

そう言ったフィフィを面倒臭そうに見やり、アシュリーはここで初めてクルスの方を見た。見たと言っても、ちらりと視線を送っただけ。クルスは即座に一礼し、部屋を出て行く。

「え、クルス嬢？」

「こっち向いて。」

アシュリーの命令に、多少腹立ちつつも向き直る。フィフィが何か言うより先に、アシュリーはフィフィの手を掴み、動かす。

「こうやって抑えてて。」

「……………」

耳飾りの石を下から持ち、耳朶に金属が当たるようにさせる。支えたフィフィの手を支えつつ、アシュリーはもう片方の手で動かないようにフィフィの頬を支えた。そして、目を閉じて唱える。

「…？？汝は我に住まう動かぬ時。我の吐息に道を繋ぎ、再び自由を与えるまで離れる事を禁ず…？」

言い終わると、耳飾りの付け根に口を寄せ、封印の魔力を吐息に込める。吐息はわずかあれば充分で、アシュリーは確かに封印されたのを確認した。

アシュリーが呪文を唱え、封印を行った直後。フィフィはアシュ

リーを思い切り突き飛ばした。本当は殴り倒したかったが、さすがにそれはまずいと思って止めた。すぐに殴れば良かったと考え直した。

「何するんだよ！」

怒るアシュリーに怒鳴り返す。

「あんたこそ何してんだ！！気色悪いだろーが！」

「は？」

アシュリーが本気で分からないようなので、フィフィは教えてやった。

「耳に息吹きかけられて気色悪いっつてんだよ！」

一瞬の沈黙の後。事態を理解したアシュリーは奮然と言い返した。

「そうしようと思ってやったんじゃない！」

「結果そうなってんだよ！」

「封印しただけだろ？」

「他にやり方なかったのか！」

「ない！！！」

きっぱりと言い放つアシュリー。フィフィは両手を握り閉めた。

その様子を見て危険を感じたのか、アシュリーは一步下がった。

「何、殴る気？」

「俺が言うのもなんだけどな」

フィフィは本当になんだけど、と思った。

「何？」

「……ちよつとは慎みを持てよ！」

「は？」

目を丸くするアシュリーを一瞥し、フィフィは足音も荒く部屋を出た。

1091 (前書き)

クルス視点です。

アシュリー・ウィルレイユ。

その名はすでに城へ上がっていた、十五の美しい大魔術師よりも有名になった。彼が城へ上がったのはわずか十の時。幼い少年を、国王陛下自ら隊を組んで迎えに行ったという。

クルスの祖母は、その様子を遠巻きに見たと話してくれた。

小さな家の前に皆が跪き、陛下が中から少年を連れて出てきた。少年は驚いた様子で隊を見ていたが、怖がる様子も、興奮する様子もなかったという。陛下が何事か囁かれると、少し面倒くさそうに顔をしかめ、それを見て陛下は笑っていたらしい。隊は歓声を上げて小さな大魔術師を祝福した。

当時、アシュリー・ウィルレイユという名は知られていなかった。というか、誰も知らなかったのだ。クルス達貴族でさえ聞いた事なかった。それくらい、無名だったのだ。

だが、陛下自ら迎えに行ったことで、その名は大きく知れ渡った。それならば、とどれだけ聞いて回っても、やはりアシュリー・ウィルレイユを知る者には出会えなかった。城の中でも不審がられていたと聞いている。それが神秘的だと貴族達は喜んでいた。滅多に人前に出ない事も、神秘性を高めていた。

そんな彼を、ヴィルジウス殿下がとても気に入っている、という噂が流れた。どこへ行くにも連れていくのだとか。

殿下と行動するようになってから、アシュリー・ウィルレイユは人間味が増した、と祖母は話していた。気難しく、何事にも興味が薄い。しかし殿下にだけは信頼を寄せている、と関係者は口々に言った。

そんな彼を直に見たのは、殿下の二十歳の祝いの席だった。

殿下の側に控え、他の者のように浮かれた様子もなく、ただ静かに側にいた。あまり見た事のない、明るい灰色の髪。深い群青色の瞳。精霊か何かかと思った。ニルヴァーナ・ハディエスを見た時もあったが、こちらはまた違う性質の神秘さがあった。何か、とても惹かれた。

その日から、クルスは他の貴族の娘達と遊ばなくなった。お茶会も社交辞令。美容も最低限。他は全て勉強に費やした。別に、アシュリーの部下になりたいとは思っていない。ただ、同じところで働きたいと思っていた。あの人と同じ場所で、生きていけたらと思った。だから、官になろうと思っていたのだ。

そうやって勉強に勤しんでいたクルスに、ニルから声かけられた。あのアシュリーに助手が出来、その人に色々な作法を教えろというのだ。これは、クルスにとっても嬉しい申し出だった。と同時に、何か物悲しかった。嫉妬かも知れなかった。けれど、あの人の役に少しでも立つならと思って引き受けたのだ。

その助手はひどかった。ニルから聞いてはいたのだが、男か女か分からないような出で立ち、態度、言葉遣い。おまけに主人であるアシュリーにぞんざいな振る舞いをする。

始めは我慢していたのだが、すぐに堪忍袋の緒が切れた。元来、

気の長い方ではない。

怒ると、助手は一瞬きよとした後、意外にも素直に謝り、態度を改めた。そうはいっても、とても礼儀にかなうものではなかったけれど。

この人にその気があるのなら、アシュリーの為に自分が教育しようと思えた。その後間近で見たアシュリーはとても冷たく思えたが、助手とのやりとりを聞いていると、案外子供みたいな人かも知れないと思った。その直後、大声で怒鳴り合う声が聞こえたけれど。

これは後できつちりとお灸を据えてやらねばならない。

「聞いていらっしゃいます？フィアニス様？」

「んー…はっ。え、ええと、どこでしたっけ？」

クルスは毎度の事だと思いながら睨みつけた。フィフィは肩を小さくしてお説教に備えている。

「わたくしは今、言葉遣いをお教えしたばかりですわね？」

「あ…すみません、どこまでやったでしょうか？」

フィフィは反省している。

が、何度同じ事があっただろうか。クルスはにこりと笑みを貼付けて言った。

「朝は苦手なようすわね。」

そう言われて、フィフィはほっとしたように首を縦に振った。

「はい、苦手です。というか頭使うの苦手なんですけど。」

「では時間帯を変えて頂きましょう。」

「え、いいんですか？」

期待している。こうした無邪気な様子を見ると、わずかに女性に見える。

「ええ、明日からは昼食の時にいたしましょう。ウィルレイユ様にそう伺って頂けますか？」

「昼かぁ、いいですね！」

「こちらで昼食を取って良ければ、こちらに運んで頂くようにもお伺いして下さいね」

優しく念を押すと、快く頷いた。それを見て苦笑してしまう。

やはり、これは嫉妬だと思う。

だから、フィフィが気を抜いているとつい意地悪したくなってしまうのだ。

（けれど、こちらが真面目にやっていますのに、この方が居眠りなどしているのですもの。これくらいは覚悟して頂かなくては？）

フィフィには、もう少し真面目に取り組めるようにしてあげるつもりだ。クルスはそう決めて、楽しそうに微笑んだ。

（？わたくしの気が晴れませんわ。）

うきうきしているフィフィを眺め、クルスはぐぐつと首をもたげそうになった苛立ちを押さえつけた。

「つつかれた……」

フィフィはお腹を抱えて歩いていた。時刻は昼過ぎ。普通なら昼食をとって倦怠感ある時間帯だが、フィフィのお腹は呻いていた。つまり、ろくに食べれていない。

「鬼だ……あの人は鬼だ……」

元々、フィフィの勉強時間は朝だった。朝起きてまず、クルスに教えを乞う。だが、フィフィがあまりに集中出来ないため、昼に時間を変更された。昼食をとりながらやりましょう、というので楽しそうだとわくわくしていたのだーが。

『言葉使いを間違えられた時点で、昼食は没収いたしますから、充分注意なさって下さいね。』

にっこり笑ってそう言い渡された。それが始まってまだ五日。いつも夕食までお腹を空かせるようになってしまった。言葉遣いは、慣れない。

「くそ……どっか…なんか食べるもんじゃないかな…」

「フィー？」

幼い声が聞こえて振り返ると、驚いた様子で走ってくるユンファがいた。

「よお、ユン。一人か？」

「はい！今お昼をいただいて、きゅうけいもいただいているところ

です。」

「昼…そうか…」

うらやましい。

「どうしたんですか？ 具合でもわるいんですか？」

心底心配してくれるユンファに感動しつつ、フィフィはここぞとばかりに詰め寄った。

「なあ、どっか食べ物分けてくれるようなところ、ないか？」

「えっ…食べるものですか？」

きよとんとしている。フィフィはこくこくと頷いた。

「腹減ってて……」

「アス様はお昼をくださらないんですか…？」

そんなのひどい、とばかりに心配してくれる。フィフィは首を振った。

「そうじゃないけど…まあ、ちよつと事情があつてな。なあ、知らないか？」

「そうですね…あ、たんれんじょうのしょくどうなら、あるかもしれない！」

「鍛錬場の食堂…ね。サンキュ。」

手を振って別れる。ユンファはまだ心配そうにこちらを見てくれた。安心させるようにもう一度手を振って、フィフィは鍛錬場に向かう。

（飯……とにかく、飯！！）

もう、表情が怖い。通りかかった官が避けている。そんな状態のフィフィに、果敢にも声をかけるものがいた。

「フィアニス様？」

聞き慣れない、穏やかな声。フィフィは空腹による機嫌の悪さを忘れて声の主を探す。すると、濃い緑の瞳の、凛々しい青年が側へ歩いてきた。その青年の名を思い出し、誰かを思い出してフィフィは首を傾げた。

「ルキセオード様？」

呼ばれて微笑むと、通りかかった女官や侍女達が悩殺されているのを見た。本人は全く気付かないのか、興味がないのか、至って平然とフィフィに話しかける。

「どうされましたか？怖い顔をされてますよ。」

そう言って笑うが、氣遣ってくれているのが分かる。フィフィは事情を説明した。

「昼食があんまり食べれなくて…鍛錬場の食堂ならまだ食べれるんじゃないかって聞いたので、そこに行こうかと。」

「…昼食ですか…」

これはまたアシュリーが疑われているな、と思ったが、ルキセオードはにこやかに案内を申し出た。

「では御一緒致しましょう。私も鍛錬場へ行くところでしたので。」
「あー…助かります。」

並んで歩き出す。フィフィはふと思いついて訊いてみた。

「…ルキセオード様は、従騎なんですよ？」

「ええ。…私にそのようなお言葉遣いをして頂かなくても、結構ですよ。」

「え？でも…」

戸惑うフィフィに、ルキセオードは穏やかに笑う。

「立場的には、似た様なものですので。」

「……………」

フィフィはまじまじとルキセオードを見つめてしまった。従騎と、大魔術師の助手は同じくらいの位置にある、と初めて知った。

「どうされました？」

長く見つめるフィフィに驚いた様子で、ルキセオードは若干緊張した様子で訊く。すると、フィフィは真剣な顔で答えた。

「…実は、俺は今言葉遣いを習ってるんですよ。それで俺の先生が、言葉遣いを間違えたら昼食を没収するんです。」

「…………それは…手厳しい方ですね…………それで空腹なのですか。」

「そうなんです。で、そうまでして言葉遣いを直せと言われてるので、ルキセオード様にどんな言葉遣いをしようか悩んでいます。」

「……………」

今度は、ルキセオードがフィフィを見つめる番だった。そして、笑い出した。

「すみません。…ああ、でも、改まった物言いをされますと…………隔たりを感じます。特にフィアニス様は外から参られた。ですから無理さなる必要はないと思いますよ。」

言われて、フィフィはほっとした。そう。本当に性に合わない話

し方なのだ。

「良かった！慣れないですよ、ほんと。口が回らなくなってくる…」

「どうか楽にお話下さい。ありのままで結構ですから。」

「ありのまま…ですか…」

少し考え、フィフィはルキセオードに訊いた。

「俺とルキセオード様ってどれくらい差があるんですか？」

「フィアニス様。უნფაにされていたような話し方で結構ですよ。」

「……………」

聞いていたのか。

「じゃあ聞くけど、どっちが偉い？」

くすくすと笑いながら、ルキセオードは答える。

「どちらが…そうですね…本当に同じくらいの地位なのですよ。」

「……………」

にや、とフィフィは笑った。

「じゃ、ルキセオード様も話し方変えて下さい。でないと隔たりを感じます。」

「……………」

虚をつかれたらしく、ルキセオードは一瞬固まった。

「…なかなか手強い。では、俺のことはルキ、と呼んで下さい。」

「ルキ様？」

「隔たりが。」

「ルキ。」

「はい。」

「その話し方はクセ？」

「ですね。いくら気をつけてもこうなってしまうので。」

「ふーん…」

「そちらはどう呼んだら？」

先程とは少し違う、何か悪戯を楽しむかのような笑みに驚きつつ、
フィフィは答える。

「好きに呼べばいいけど。」

「好きに…ですか。」

少し考え、ルキセオードは頷いて言った。

「では、フィースと呼びます。」

「フィース？」

「ええ。」

フィフィは記憶をまさぐる。

「…あんま呼ばれたことないな。」

「そうですか？」

それもそうか。とフィフィは考える。元々名前はフィフィ、なのだから、どう考えたって“ス”は入らないのだ。

「新鮮だな…」

「気に入ってもらえたようですね。」

そう言ったルキセオードは楽しそうだ。フィフィは笑い返した。

鍛錬場へ着くと、ルキセオードはフィフィを食堂へ案内した。通りかかる兵士達は皆ルキセオードに敬礼し、不思議そうにフィフィを見ていた。

食堂へ入ると、皆一斉に立ち上がり、大きな声でルキセオードに挨拶する。ルキセオードが軽く返し、楽にしろ、と言うと途端にもとの騒がしさが戻った。

騒がしいといっても、すでにほとんどの者は昼食を終えているらしく、人はまばらだった。それでも元気が溢れているから、昼食時はもっと騒がしいのだろう。

「さ、フィース。好きなものを選んで下さい。」

ルキセオードが並んだ料理を示して言う。選ぶ前に、フィフィは首を傾げた。

「ルキはもう食べたんじゃないのか？俺に付き合う必要なんかないぞ。」

そう言うと、ルキセオードは微笑んで答える。

「いえ、フィースの昼食に付き合うくらいの時間はあります。それに、少し話してみたいと思っていましたから。」

「……ならいいけど。」

言いながらも料理を選び出している。

一通り見て、大きな肉がごろごろ入っているものを選んだ。

「これ、なんの肉？」

給仕の若者に聞くと、元気よく答えてくれた。

「牛ですよ！一番人気！」

「だよなあ。うまそーだもんな。」

それだけで満足そうに皿に盛り、ルキセオードと向かい合わせで

席に着き、もくもくと食べ始めた。その様子を見ていたルキセオードだが、ふとフィフィがしている耳飾りに目を留め、眺める。

「ん？」

気付いたフィフィが訊ねると、ルキセオードは不思議そうに訊いてきた。

「あ…その耳飾りはアシュリー様のものでは？見た事があります。フィフィはもくもくと咀嚼してから答える。

「そうそう。この間…その先生が付く時に、無理矢理つけろって言われて…。多分ウィスperlがなんか言ったんじゃないかな。」

「…ウィスperlというと、アシュリー様の使い魔の？」

「…やっぱり知ってたんだ？そう。俺には鈴の音にしか聞こえないけどな。鳴らなくても耳を傾けるような時もあるから、やっぱなんか、魔術の一種で会話してんのかな。」

ルキセオードはますます不思議そうに、興味深そうに耳飾りを見つめる。

「俺も詳しくは知りませんが、その耳飾りの石は瑠璃石という宝石で、数ある瑠璃石の中でも妖精が宿る石だそうですよ。そういうものを、魔術師は“精石”と呼ぶようですが…」

そこまで言って、ルキセオードはフィフィがきょとんとしているのに気付いた。

「？…どうしました？」

「…いや、ルキって自分の事、俺って言うんだ？ほんととは。」

「ああ…そうですよ。私、というのも半分クセですが…」

「ふうん…」

再びもくもくと食べ出したフィフィに、ルキセオードは訊ねた。

「アシュリー様は、何故ウィスペルを貴方に？」

「自分で呼びに行くのが面倒臭いからだよ、あの人は。ウィスペルが連絡役を買ってくれたんだよねー？」

呼びかけるように言うと、耳元でちりん、と鈴の音が答えた。その様子に、ルキセオードは感心した面持ちだ。

「…すっかり懐いていますね。」

「そうなのか？　なんか、始めからこんな感じだけだな。」

「…それは…なんとも珍しい…」

「あ、そーだ。俺も訊きたい事があるんだけどさ。」

「はい、なんですか？」

「エウエラって誰か知ってるか？」

フィフィはあの、ヴィルジウスとの対戦を思い出しながら訊いた。

「…エウエラ……。時の大魔女ですね。彼女の何を知りたいんですか？」

「俺さ、ニル様にこんな描かれたんだけど、なんか凄い事になってるらしくて。どういう事になってるか分かるか？」

差し出されたフィフィの手をとり、ルキセオードはまじまじと見つめた。

「……エウエラの図形……」

「なんか、皆が言うからそれは分かったんだけどさ。オルクス様は樹力が混ざってあるっていうし…そもそもどんな意味があるのかと思っ
つて。」

「…殿下の体勢を崩す事が出来たのは、これがあったからなのですね…。」

ルキセオードは真剣な面持ちで凶形を見つめていた。その真剣さに、フィフィは少し不安を感じる。

「……ルキ……？」

「……エウエラは、ヴォルテール王の時代からイルジス王の時代にかけて存在していた大魔女です。」

「え、それってつまり、いつ？」

慌てて問いかけるフィフィに、ルキセオードはくすりと笑った。

「我らが王、ウルセデイ陛下の四代前に当たる王の時代に生きていました。」

「ん…それならなんとなく分かる…かな。」

難しそうに頷くフィフィに、ルキセオードはなるべく簡潔に話す。

「エウエラは他に類を見ない程の魔力の持ち主で、魔術の使い手でした。時を経るごとに外見も中身も衰えるのが人ですが、エウエラは身体的には何ひとつ衰えず、魔力、魔術に関してはますます強大になっていった。」

「…つまり、見た目はもう、どっかで止まってた…？」

「そうです。そして…はつきりとした時期は分かりませんが、彼女は人でなくなっていた。」

「……？えっと…不老は人のうちに入るのか？」

心底納得出来ない様子で言うフィフィに、ルキセオードは軽く笑った。

「肉体があるので、一応は。エウエラは今や“大精霊”です。世界の気脈に身を置き、契約によって人に力を貸す。普通、大精霊ともなれば簡単に接触は出来ないのですが、エウエラは元が人であったからなのか、案外気楽に人と関わっているようですね。」

「気楽……」

呆れたように言うと、ルキセオードは再びフィフィの手にある図形に視線を落とした。

「…エウエラは特に、魔女に力を貸すのが好きなようですね。エウエラと契約出来るのは女性が多いようですから。…そして、貴方にも興味がおありのようだ。」

「え、俺に？」

「エウエラは例え契約者の言葉であろうと、気に入らない相手にはわずかの力も貸さないようなので、まず、貴方に興味があると考えたいでしょう。」

「……………」

不思議だ。工作上、魔術師と関わる事はあっても、それはほとんどの場合、味方ではなかった。魔術師のように魔術に携わり、精霊や妖精や神と力を共有したり、そういう存在を尊いと思った事はないのに。何故、エウエラという大精霊はフィフィに力を貸すのだろう。フィフィはまじまじと図形を見つめた。

「樹力ってのは？」

「……対象のものを“成長”させる力だと聞いています。」

「成長？」

訊ねるフィフィに、ルキセオードは若干困ったように首を傾げた。

「…これ以上は俺には……」

「ああ…武人だもんな。魔術の事は魔術師様に聞いた方がいいか…」

とは言っても、主であるアシュリーは面倒臭がつて説明してくれない事は確実だし、ニルもにこりと笑ってはぐらかしそうだ。

「ま、先生にでも聞いてみるか。」

「そうして下さい。」

苦笑しながらルキセオードがそう言つて、フィフィはそれを見て笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0876y/>

大魔術師と助手

2011年11月8日07時38分発行